奴山古墳群

福岡県宗像郡津屋崎町所在奴山33・34号墳の調査

津屋崎町文化財調査報告書

第3集

1981

津屋崎町教育委員会

序

今回の緊急発掘調査は、農業振興施策の一環として企画建設される施設カントリーエレベーター（麦等大規模乾燥調整出荷施設）の用地内の二基について、県教育庁文化課の協力を得て記録保存の措置をとったものであります。

第33・34号古墳（津屋崎町大字奴山字月花）は町の北東丘陵部に密集する奴山古墳群の西端部に当り、広々とした勝浦・津屋崎の平地が眼下に開け、指呼の間には玄界の白波をへだてて浮ぶ大島・相の島・海上はるか沖の島を望む景勝の地に位置し、万葉の古歌にも残る、往時都と大宰の府庁を結ぶ交通の要衝として、背後の名児山越えをしてゆききした旅人で、にぎわった由緒ある土地でもありました。

調査は県教育庁文化課児玉、伊崎両技師の御指導と、関係者各位の御協力によって、無事に完了することが出来ました。当報告書が皆様の文化財研究の一資料として活用していただければ、幸せに存じます。

昭和56年３月31日

津屋崎町教育委員会
教育長　**永　島　市　蔵**

例　　言

1．本書は宗像農業協同組合によるカントリー・エレベーター建設に伴って破壊された奴山33･34号墳の調査報告である。
2．本書の執筆はII－３の遺構について伊崎が他は児玉が担当した。
3．遺構および地形実測にあたっては県文化課酒井仁夫・中間研志両氏の、遺物写真の一部については九州歴史資料館平島美代子氏の助力を得た。また、遺構の製図にあたっては、平田春美・豊福弥生・須山富子氏の協力を得た。
4．本書の編集は伊崎の助力を得て児玉が担当した。

目　　次

I　はじめに……1
　1．調査の経過と組織……1
新原・奴山5・6号　2．奴山33･34号墳の位置と環境……1
II　調査の内容……3
新原・奴山11号　1．奴山11号墳……3
5号　2．奴山33号墳……3
6号　3．奴山34号墳……20
III　おわりに……31

Ⅰ はじめに

1. 調査の経過と組織

宗像農業協同組合によるカントリー・エレベーター建設予定地内に円墳３基が存在し、そのうち11号墳は津屋崎町作成の分布地図に記載されており周知の古墳であったためか保存の措置が講じられ、分布図に記載されていない33・34号墳については建物の配置上設計変更して保存することが不可能であるため、やむなく発掘調査を実施し、記録にとどめることとなった。

調査期間および関係者は次の通りである。

所　在　地　　福岡県宗像郡津屋崎町大字勝浦字月花

調 査 期 間　　昭和55年４月２日～同４月26日

調査関係者

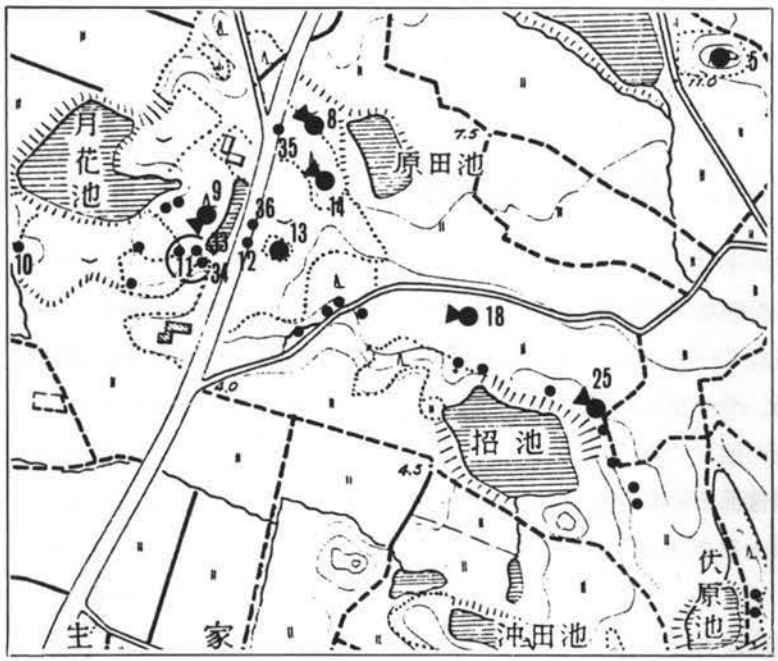
総　　括	津屋崎町教育委員会	教育長	永島　市蔵
		社会教育課長	塙　多喜男
庶務担当	津屋崎町教育委員会	中央公民館書記	上田　幸一
		同	石津　千春
調査担当	福岡県教育庁管理部文化課	主任技師	児玉　真一
		技　　師	伊崎　俊秋
整理担当	九州歴史資料館		岩瀬　正信

この他、文化課より酒井仁夫・中間研志氏の来援があった。調査の実施にあたっては福岡県文化財保護指導委員永島俊一氏より物心両面にわたる協力を頂いた。

工期の関係から調査は春爛漫の四月に実施し、そのために石室の完存する33号墳で冬眠後少しずつ動き始めた蝮や青大将の大軍に悩まされた。安全対策上、これらの蛇類の除去のための種々の作戦を展開したが、結局は一匹ずつ石積みの間から引きずり出す外はなかった。47匹にのぼる蛇退治のために活躍された津屋崎町教育委員会社会教育課の諸氏に感謝し、今は亡き高田正夫氏の御冥福を祈ります。

2. 奴山33・34号墳の位置と環境

両墳は現状保存された11号墳とともに福岡県宗像郡津屋崎町大字勝浦字月花に所存し、前方後円墳を含む数十基からなる奴山古墳群の最も西側のグループに属する。津屋崎町の古墳群についてはこれまでたびたび分布調査がなされ、古墳番号に混乱をきたす恐れがあるので、ここでは福岡県が1977年に作成した「福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）」によることにする。また後述の註１文献では昭和46年度分布調査の番号を使用しているので本書で使用する古墳番号と対比すれば次頁のようになる。



第１図　奴山古墳群分布図（１/10,000）

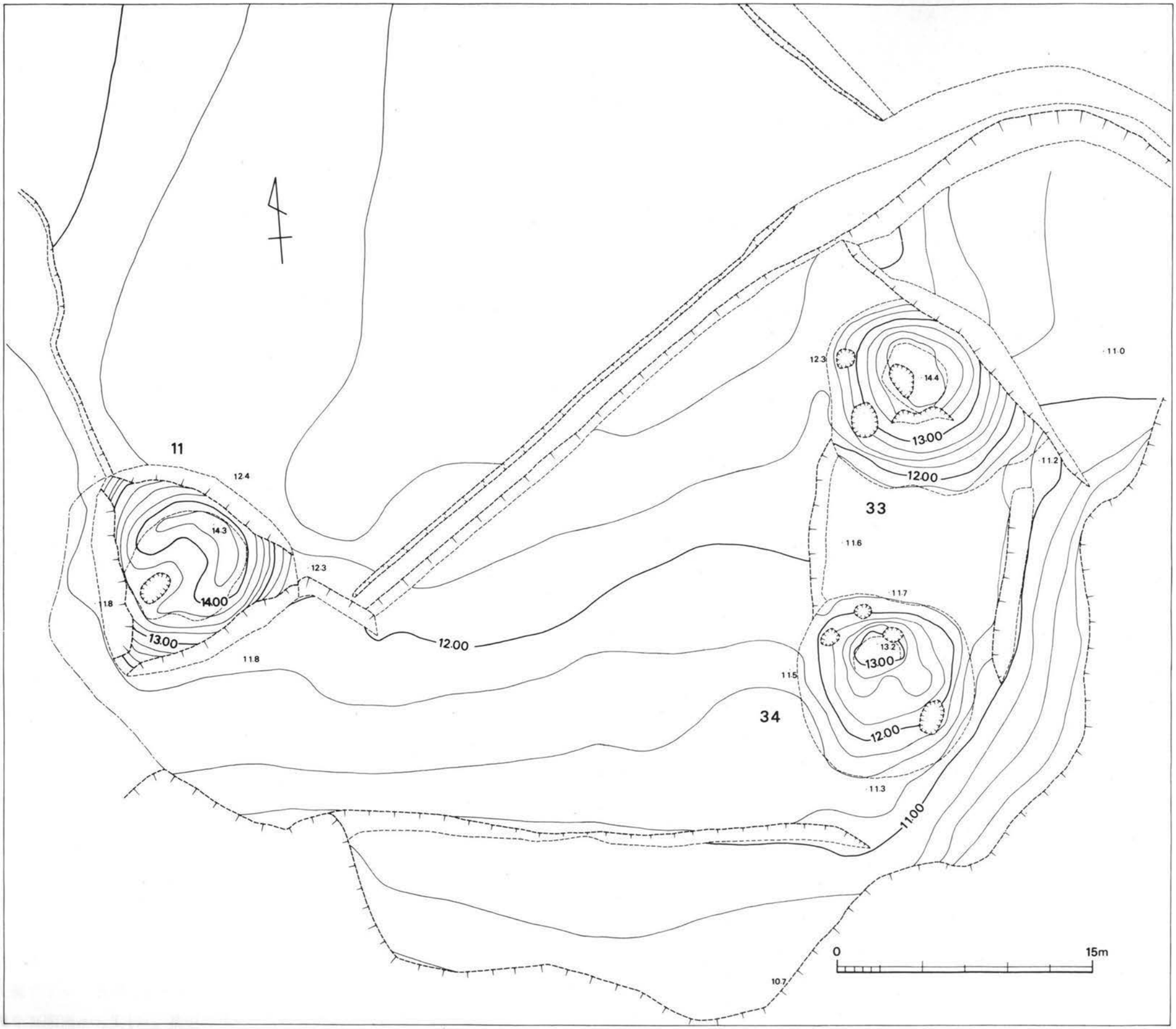
（註１文献）	（本報告書）
津 17 号墳	奴山８号墳
津 22 号墳	奴山９号墳
津 37 号墳	奴山10号墳
津 23 号墳	奴山11号墳
津 18 号墳	奴山12号墳
津123号墳	奴山35号墳
津124号墳	奴山36号墳
津 10 号墳	勝浦12号墳
津 41 号墳	勝浦14号墳

その他については県作成の分布地図によられたい。

さて、ここに報告する古墳は東西にのびる低丘陵に構築され、丘陵の北・西・南は現在５～６ｍ程の落差をもって水田となっているが、往時はこの丘陵崖面付近が汀線で潮が寄せていたと思われる。まさに海辺である。東は現在、主要地方道若松―芦屋―福間線が南北に走り、この道路に沿って谷がはいり込んでいる。33・34号墳、12･35･36号墳石室はこの谷に向かって開口し、谷の性格の一端を示唆している。

最近、津屋崎町内では数回にわたって古墳の発掘調査がなされており、町内北半部では上記の主要地方道若松―福岡線建設に伴って勝浦12･14号墳、奴山８･12･35･号墳（註１）が、特別養護老人ホーム建設に伴って奴山５号墳（註２）が、町内南半部では宅地造成によって清田ヶ浦１～11号墳（註３）が調査された。奴山５号墳は径26ｍの円墳で大形箱式石棺を内部主体とし、５世紀前葉に比定されている。現状では奴山古墳群を含む津屋崎町内では最古の古墳と目され、前方後円墳ではないこと、在地的な箱式石棺を埋葬施設とすること、武器を中心に大量の鉄製品を持ち朝鮮製と思われる陶質土器が出土していることなどは、古墳群形成初期におけるこの地域の持つ社会的性格を反映し、ヒンター・ランドを殆ど持たないこの地域のその後の社会的活動の場と性格を示唆している。やや間をおいて勝浦12･14号墳等の前方後円墳が町内北部で成立する。継続して構築される前方後円墳は奴山・生家・須多田地区へと南下し、町内では可能性のあるものを含めて18基の存在が知られている。このことは当該地の畿内政権との関係性の深さを想起させ、前方後円墳の分布上の密度の濃さは「宗像君」グループの政治的力量を示すものと解される。調査された勝浦14号墳では鏡７面を有し、同12号・奴山８号とともに武器を主体に馬具や甲冑類を持ち、畿内政権の朝鮮半島への前進基地としての性格の一端を窺い知ることができよう。

奴山33・34号墳はそのような流れの過程で構築されたものでありながらも、被葬者の性格を



第2図　奴山11・33・34号墳墳丘実測図（1/300）

推定しうる副葬品の残りが悪いのは惜しまれる。

註 1. 石山勲・川述昭人「新原・奴山古墳群」福岡県文化財調査報告 第54集 1977 福岡県教育委員会

2. 佐々木隆彦「奴山５号古墳発掘調査報告」 1978 津屋崎町教育委員会

3. 小池史哲「清田ヶ浦古墳群発掘調査報告」 1977 津屋崎町教育委員会

II 調査の内容

1. 奴山11号墳

保存されるので、墳丘測量だけを行った。墳丘および石室の過半が破壊されているが、径15m程度、高さは現在２m、当初は３m以上はあったと推定される円墳で、石室は南西に開口している。石室は横穴式石室で現在は丁度玄門の部分が露出し、玄室部分が陥没している。多分単室の石室だろうと思われる。

2. 奴山33号墳

(1) 墳　　丘

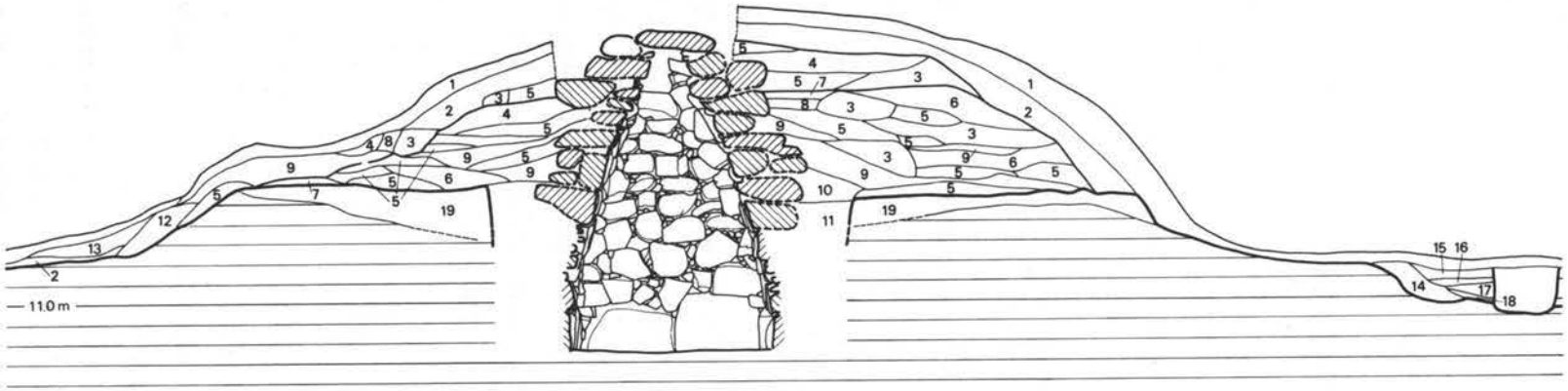
蜜柑園造成の時に墳丘北東側が削り取られているが、樹木伐採後のみかけの墳丘規模は北西～南東の直径約13m、高さは北西側で約２m、南東側で３mを超える。天井石はすでに露出していた。墳頂部に盗掘坑があり、かつて近住の人が鉄刀を持ち出したが祟りを恐れて再度埋納したという（註１）。

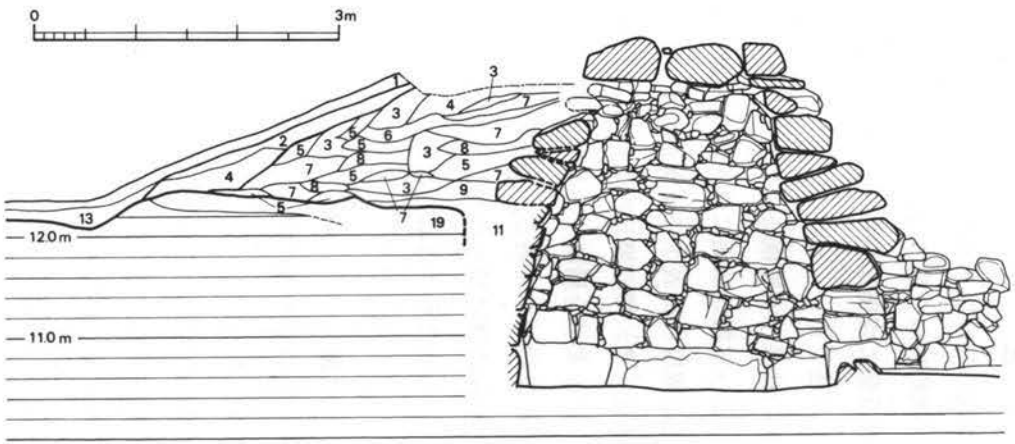
墳丘調査の結果、本墳構築に先だって地山整形がなされており、旧表土層の表面をうすく剝いでいる。よって墳丘断面には明確な旧表土層は観察されず、地山にはやや黒味を帯びるために分層しうる程度の旧表土の下層部分がのっている。石室掘り方はこの面から切り込んでいる。また、墓道右（東）側の墳丘内で検出した土器群もほぼこの面である。墳裾部はかなり削平を受けているが、玄室を横断する墳丘断面によれば、幸いにも墳裾部らしきものが認められ、この部分での径は約13mである。本墳の玄室中心はおおむね墳丘中心部付近に位置するようであり、本墳の当初の径は13m程度、天井石上にさらに１m程度の盛り土の存在を想定すれば高さは３～４mであったろうと思われる。

(2) 石　　室

単室の横穴式石室でほぼ完存し、南東に開口する。石室は地山深く穿たれた掘り方内に構築され、主軸全長4.6mで、長さ５m以上の墓道が接続する。玄室壁体は掘り方床面から高さ約２～1.7mまでの部分が石室掘り方内に、それ以上の壁体が石室掘り方から出て盛り土中にある。石室掘り方から出る壁体は全体のおよそ１/３程度である。

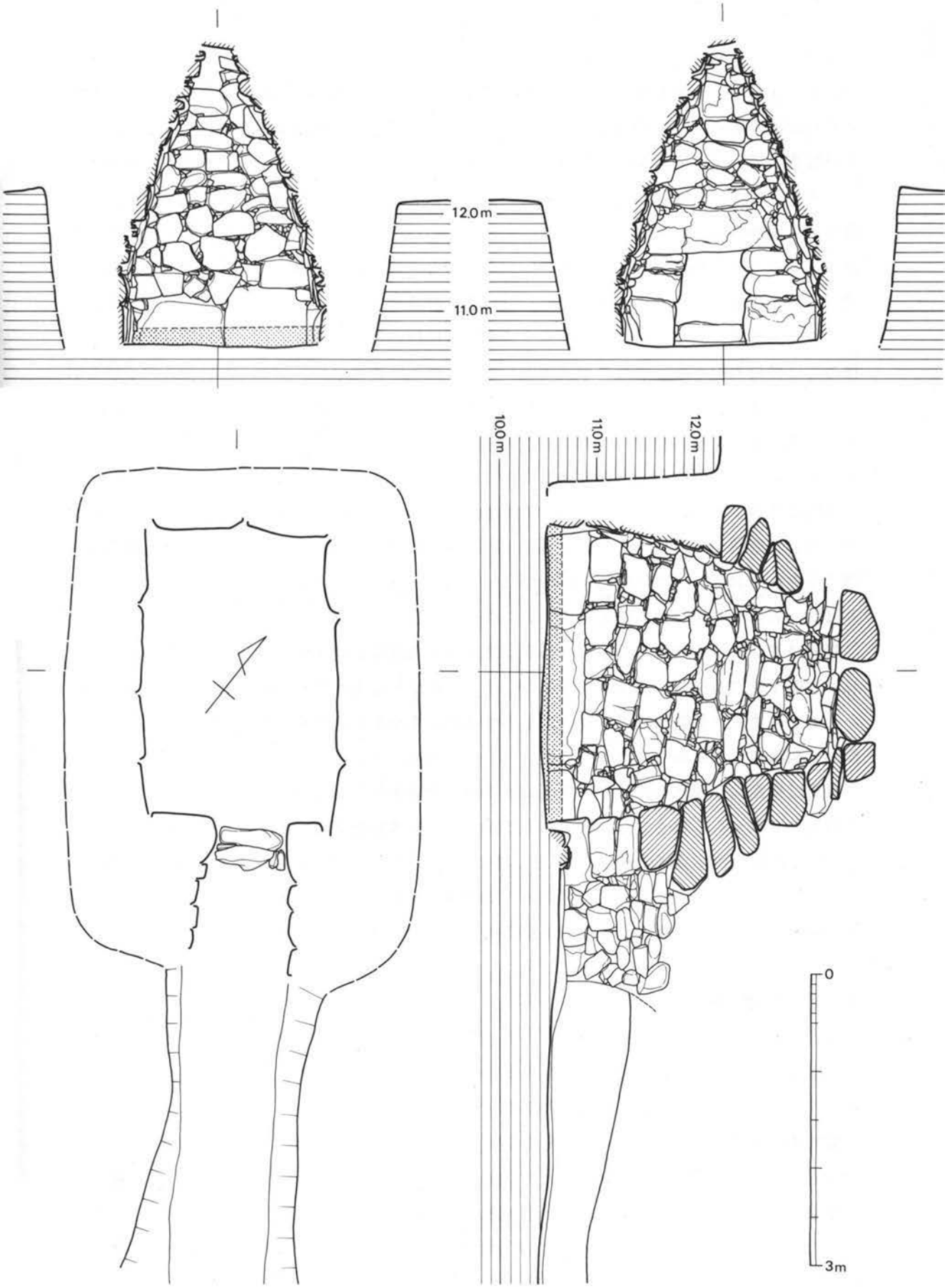
玄室の床面プランは長方形を呈し、奥壁～仕切石前面の主軸長3.1m、左・右壁長2.9m、幅は中央部で２m、奥壁で1.85m、前壁で1.9mを測る。天井石までの高さは、玄室中央部で、石室掘り方床面から3.1m、推定床面から2.9mである。すなわち、玄室長と天井石までの高さ





1. 表　　土
2. 灰色混黄褐色砂質土
3. 灰黄色粘質土
4. 淡赤褐色粘質土
5. 淡赤褐色粒混灰黄色粘質土
6. 淡黄色粒混淡赤褐色粘質土
7. 赤褐色粒混淡赤褐色粘質土
8. 白赤粒混赤褐色粘質土
9. 赤褐色粘質土
10. 茶褐色粘質土
11. 茶褐色粒混強粘質土
12. 赤褐色粒混黄褐色砂質土
13. 黄褐色砂質土
14. 赤褐色粒混黒色砂質土
15. 黒色砂質土
16. 灰黄色粒混黒色砂質土
17. 灰色粘質土
18. 灰色砂質土
19. 旧 表 土

第3図　奴山33号墳墳丘断面図（1/80）



第4図　奴山33号墳石室実測図（1/60）

の割合は１対１、玄室長と幅の割合は1.5対１である。奥壁上部に盗掘時の侵入口があり、数個の石材が取りのぞかれている他は、石室壁体はほぼ完存し、土圧によるゆがみもほとんどない。奥壁は腰石として２石を用い、その上に10段程の石積みを行い、壁体の間隙を小石と粘質土でパッキングする。壁面は割と不揃いで石の面は揃わない。また、石積みの持ち送りは割と急で、掘り方床面から高さ1.8ｍまでの傾斜は約80度、それより上は約70～75度である。奥壁の断面はゆるいカーブを描いている。左・右両壁も奥壁と同様の石の積み方をしている。持ち送りは急で、約75度を示し、天井が高いために“合掌形”を呈する（註２）。前壁は周壁の他の壁体に比べてやや大き目の石材を用いている点をのぞいて同様の石の積み方を行っている。周壁の石の積み方は使用石材が小さいためか、腰石・袖石・楣石をのぞいて、すべて小口積みの手法を取っている。また、床面には径３～５cm程の玉砂利を厚さ15cm程敷きつめていたようであるが、石室が荒らされた時に副葬品と共に原位置を移動しており、周壁側に寄せ集めたような状態であった。よって正確な石室床面は検出できなかった。

玄門は床面で幅0.7ｍ、上部で0.6ｍ、高さ0.7ｍを測る。袖部は左右各三段の積み石からなり、楣石を架構する。仕切り石は２石を並列するが間隙が生じ、小石を詰めている。閉塞は玄門でなされており、一枚の板石を倒れかかった状態で検出した。この板石下面と床面との比高差は20cm弱あり、追葬の際の閉塞であったことは明白である。

羨道は長さ１ｍで玄門とほぼ同一幅ではじまり、墓道側で幅１ｍを測りやや幅広となる。これは右壁下段の石積みが石室主軸と並行しているのに対して左壁が斜交するように構築されていることによる。羨道両壁の石材は玄室周壁に比して小形の石材を使用している。天井石は当初から架構されてなかったようである。

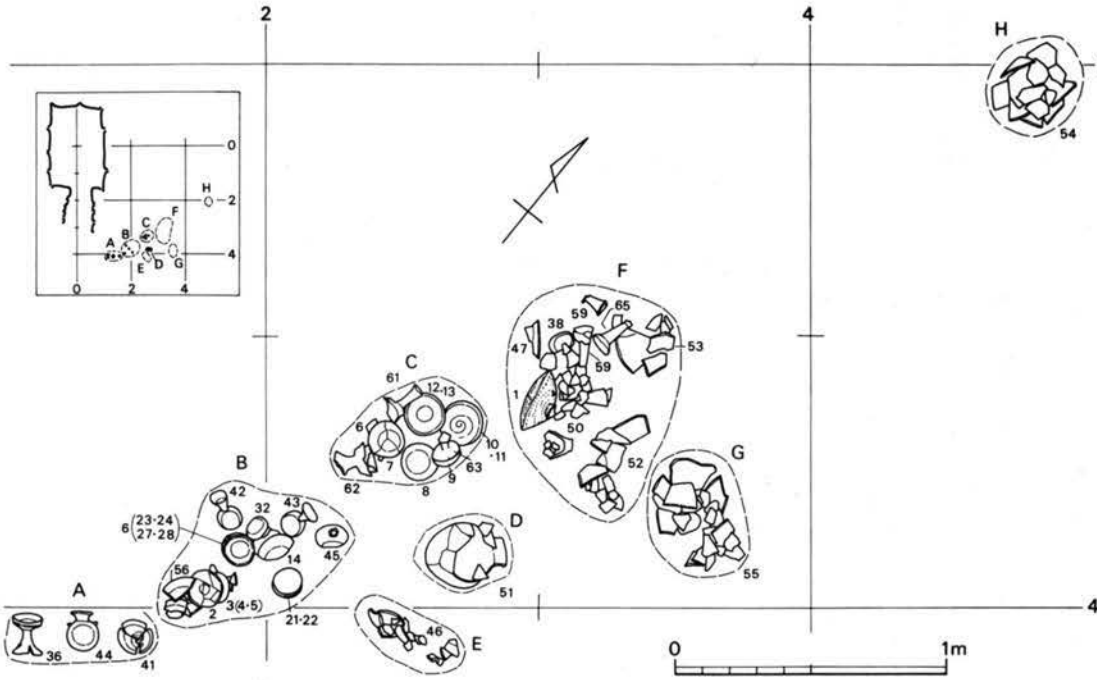
墓道は横断面が逆台形を呈し、床面幅約１ｍ、深さ１～1.2ｍ、上端幅1.4ｍ程度を測り、安全対策の関係から５ｍまでしか確認できなかったが、墳裾部で収束することなく更に続くようである。墓道は徐々に墳丘の盛土が流入して埋まったようであり、先述した閉塞石が20cm弱程浮いており、玄門から３～４ｍの部分で、底面から70cm程上に黒色土の堆積があり、この部分から須恵器片を検出しており、石室構築後一定の期間後はほぼ墓道は埋まっていたようである。（註３）

(3) 出土遺物（図版２・４、第５図）

遺物は玄室内、墓道埋土中、墓道右（東）側墳丘、墓道左（西）側墳丘の４ヶ所から出土した。鉄器は主に玄室から出土し、墓道埋土中からは鉄刀片が出土している。土器は第９図31の蓋をのぞいて他はすべて石室外からの出土品である。

玄室内　徹底的に荒らされており、原位置を保つものはない。刀子４点（第６図１～４）、須恵器蓋（第９図－31）が敷石たる玉砂利に混じって出土した。

墓道　埋土中で床面から約70cm上層の黒色土中（おそらく追葬時の墓道床面に相当する）から須恵器坏身・蓋（第８図－19・20）、脚台付短頸壺（第11図－47）や須恵器・土師器の小片が出土している。



第５図　奴山33号墳土器出土状態実測図（1/30　数字は土器実測図の番号と対応する）

墓道右墳丘中　須恵器44個、土師器10個体が出土している（図版４・第５図）。これらは墳丘構築前のほぼ石室掘り方切り込み面から出土し、一部にその面からやや浮いた状態で出土したものもある。これらは８つのグループ（Ａ－Ｈ群）に分けられ、Ｈ群だけ離れて存在する。これら８群の土器は石室および墳丘構築の過程でとり行われた“まつり”の供献土器であり、器種は豊富である。出土状態から見て時期差は認め難い、各群各々数個～十数個体でまとまって出土しており出土状態および器種構成と個体数は次のようである。

Ａ群――須恵器だけからなり、41の高坏の脚が飛んでいるが、略原形を保ち、整然と並ぶ。

Ｂ群――須恵器の他に土師器と「赤焼き」が含まれる。「赤焼き」はこのグループだけに見られるもので坏では蓋と身がきちっとセットで置かれているわけではなく、数個体が重なり合っている。23・24のセットの場合は、蓋と身が上下逆転した状態でおかれ、身が蓋の役割を果たしているようである。高坏56が破片となって出土している他は原形に近い状態で出土しており、意識的に破砕されたという形跡はない。

Ｃ群――須恵器の坏蓋、身が合わさって４セット、土師器脚付坩３個体が出土している。坏蓋・身のセットのうち、10・11のセット以外の３セットは、一般的に身とされている方が、蓋とされているものの上にかぶさった状態で出土している。土師器は破損しているが、自然と割れたもので意識的なものではない。

Ｄ群――壺１個体を横倒しの状態で検出した。自然に割れたようである。

Ｅ群――提瓶１個体分を破砕された状態で検出した。

Ｆ群――須恵器（高坏・皮袋形土器・壺・脚台付長頸壺・同蓋・俵形瓮）と土師器（埦・脚

付埦・高坏）からなる。意識的に破砕されたと思われるものが多い。

G群――甕1個体分が破砕されて出土している。体部の一部と口縁部を全て欠失し、復原できない。

H群――甕1個体分が破砕された状態で出土している。

第1表　各群毎の器種別個体数一覧表

器種	須恵器											赤焼			土師器			
	坏身	坏蓋	高坏	俵形瓶	提瓶	皮袋形土器	坩	脚台付長頸壺	同蓋	壺	甕	坏身	坏蓋	提瓶	高坏	埦	脚付埦	脚付坩
A 群			2		1													
B 〃	2(+)	2(+)			2		1					3(+)	3(+)	1	1			
C 〃	4	4																3
D 〃									1									
E 〃					1													
F 〃			1	1		1		1	(1)	2					2	(1)	1	
G 〃											1							
H 〃											1							

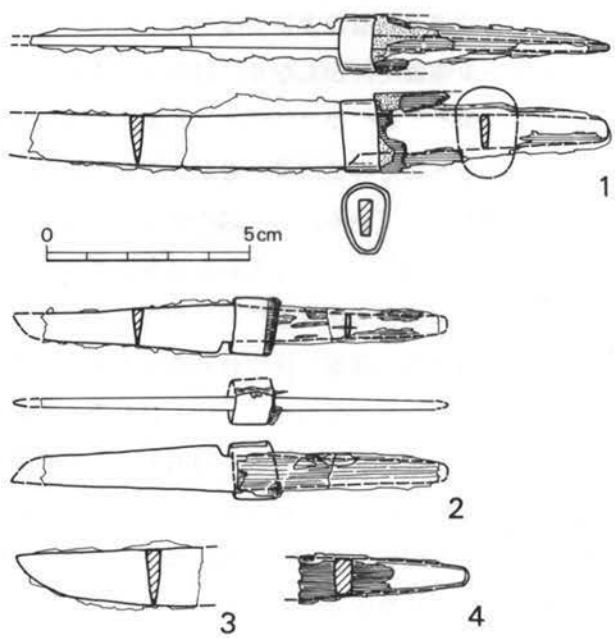
※この表の個体数は第5図に示す個体数および第7～14図に示す個体数と実数は合わない。

墓道左墳丘中　坏身・蓋各1(16・17)、高坏（39・40）、大形瓶（34）、直口壺（35）の須恵器と「赤焼き」と思われる高坏(33)が出土している。これらは先述した墓道右墳丘中の土器群と同様の在り方をしているが、量的には7個体で少ない。

鉄　器（図版7、第　図1～4）

刀　子　いずれも完形品ではないが、1、2はおよそ原形を窺い知ることができる。また両者は木柄の装着方法が鍔金具との接続のし方において相異が見られる。

1は身の先端を欠失し、現存長14.3cm、身幅1.3cm、茎長6cmを測る片関の刀子で長径1.8cm、短長1.3cm、幅0.8cm、厚さ0.2



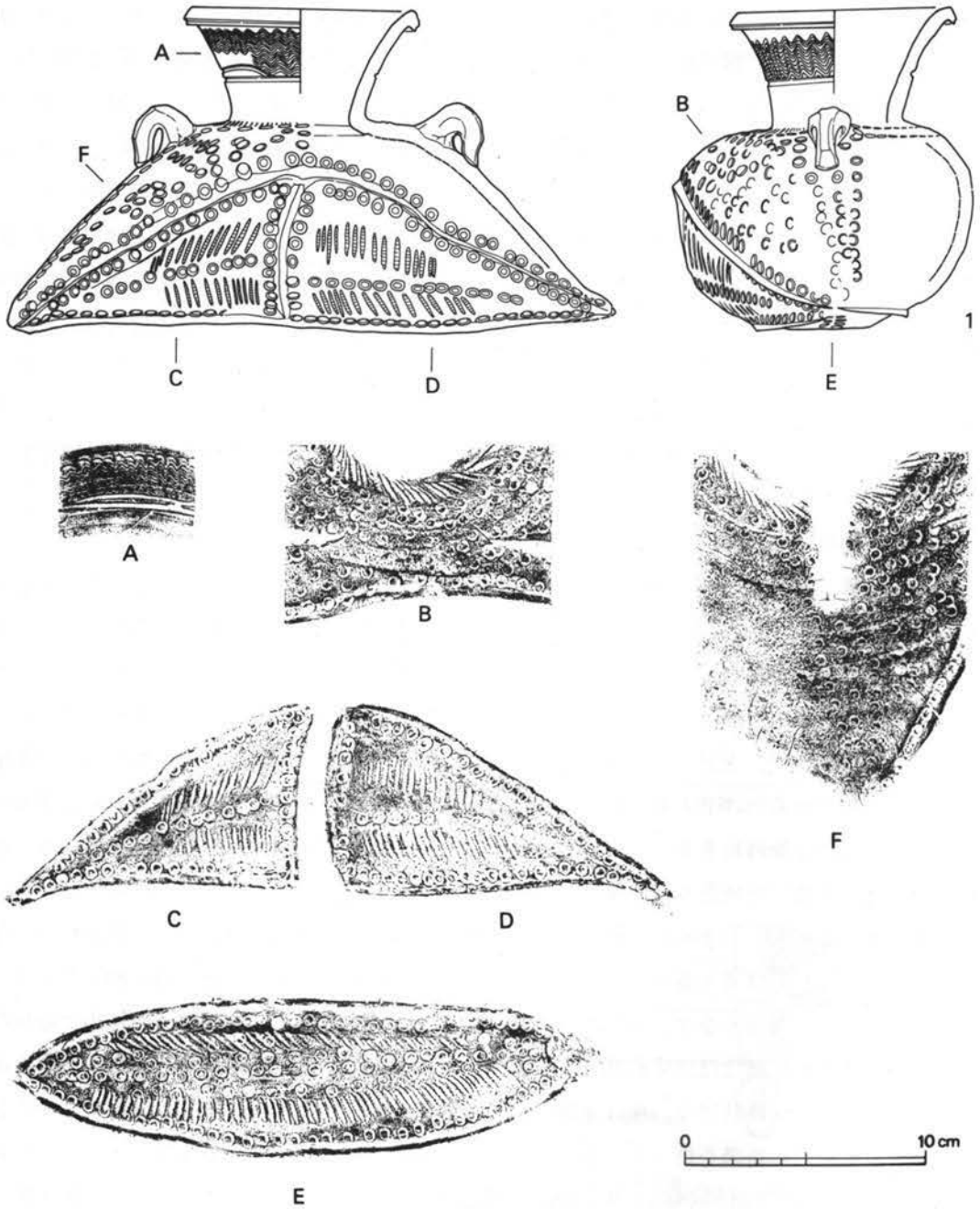
第6図　奴山33号墳出土鉄器実測図（1/2）

cm程の鍔金具がつく。身に木質の銹着は観察されず、鞘に納められていなかったか、又は、非木質の遺存しにくい材質で作られた鞘にはいっていたと想定される。茎は関部から茎尻に向かってその幅を減じ、端部を丸くおさめる。木柄の一部が銹着して遺存しており、残りの最も良い鍔金具寄りの部分で、長径2.2～2.3cm、短径1.6cm程度の楕円形に似た断面を示し、茎はほぼ中央にはさみ込まれた形となっている。木柄は鍔金具内にもぐりこみ、鍔金具で固定されている。この部分の木柄の形態はあたかも丸瓦の玉縁を想起させる。そしてこの玉縁の部分が鍔金具の中にもぐって固定されているのである。２は小形品で関付近を除いて研ぎ減りして細身になっている。現状で全長9.8cm、茎長6.3cmの片関の刀子である。身に木質の付着は見られず、茎の木柄の一部が銹着している。鍔金具と木柄との装着方法は１とは異なり、２は木柄に差し込むような形をとるため、鍔金具の内側のみならず表面にも木柄が銹着している。３・４とも小片で、前者は長さ4.5cm、後者は4.2cmをはかる。共に１・２に比べて大形で、４は茎としては１・２と比べて特に厚い。或いは小刀の茎かと思われる。

須恵器（図版８・10～13、第７図～13図）

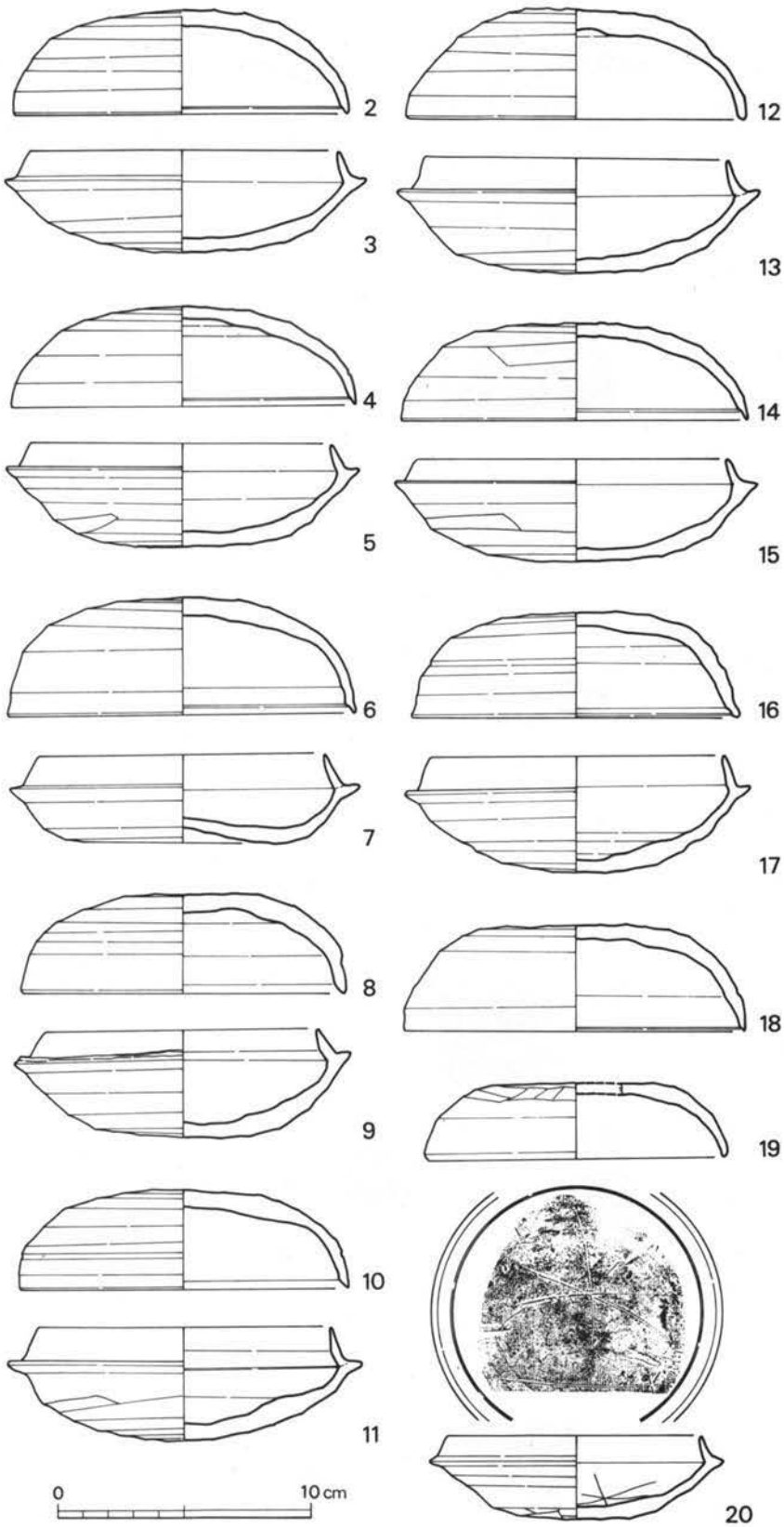
皮袋形土器（１）　口縁部を打ち欠かれた状態で検出した。破片はあまり散乱せず、復原すればほぼ完形品となる。口縁径９cm、器高13.4cm、底部長径25cm、同短径6.2cm、胴部最大厚（側面図での幅）12.3cmを測る。皮袋の合わせ目・縫目は粘土紐の凸帯と竹管文で表現される。施文具は櫛と竹管で、口縁下には櫛を用いてロクロの回転を利用した波状文が、肩部以下はロクロの静止した状態で、上記二つの施文具により装飾されている。施文は、肩以外の部分は前面と両側面に施されるだけである。肩に把手が二つあり、提瓶として使われたと思われるが座りもよい。胎土には微砂粒を多く含み、焼成は良好で堅固にして緻密で、うすく灰をかぶり、暗灰色、鉄銹色を帯びた灰色を呈す優品である。

坏身・蓋（２～30）　２～20は普通の須恵器で、21～30は一般に「赤焼き」と呼ばれているものである。これらは身と蓋が合わさった状態で検出したものが多く、18～21・29・30をのぞいて確実にセット関係をなす。19・20をのぞいて他はすべて墓道右（東）側の墳丘内で検出した。２～18のうち坏蓋はほぼ完形品で、口縁径13～13.8cm、器高４cm前後をはかる。ロクロの回転方向は６・８が時計回り、他は逆時計回りである。６・10に古い名残りを認め得るが、12は中でも最も新しい特徴を持っている。しかし、総じて回転ヘラ削りの範囲はせまく、作り自体も割と雑である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質なものを含み暗灰色～青灰色を呈する。13～17のうち坏身はほぼ完形で、口縁部径11～12.5cm、蓋受部径14cm前後、器高3.5～4.5cmを示す。９の蓋受部には８を重ねて焼いた痕跡が明瞭であり、８の口縁部の半周分が９に付着している。８・９のセット程明確ではないが、他のセットも灰のかぶり方、色調の変化より判断して蓋と身を合わせて焼いた可能性が高い。ロクロの回転方向は７が時計廻り、９が不明の他は逆時計廻りである。８・９のセットを除いて身と蓋のロクロの回転方向は一致しているので、９も８と同様に時計廻りの可能性が高い。5・12・11にヘラの抜けた痕跡がある。胎土・焼成・色調・整形技法・調整等は蓋と同様である。19・20は墓道埋土中（床面より70cm程上



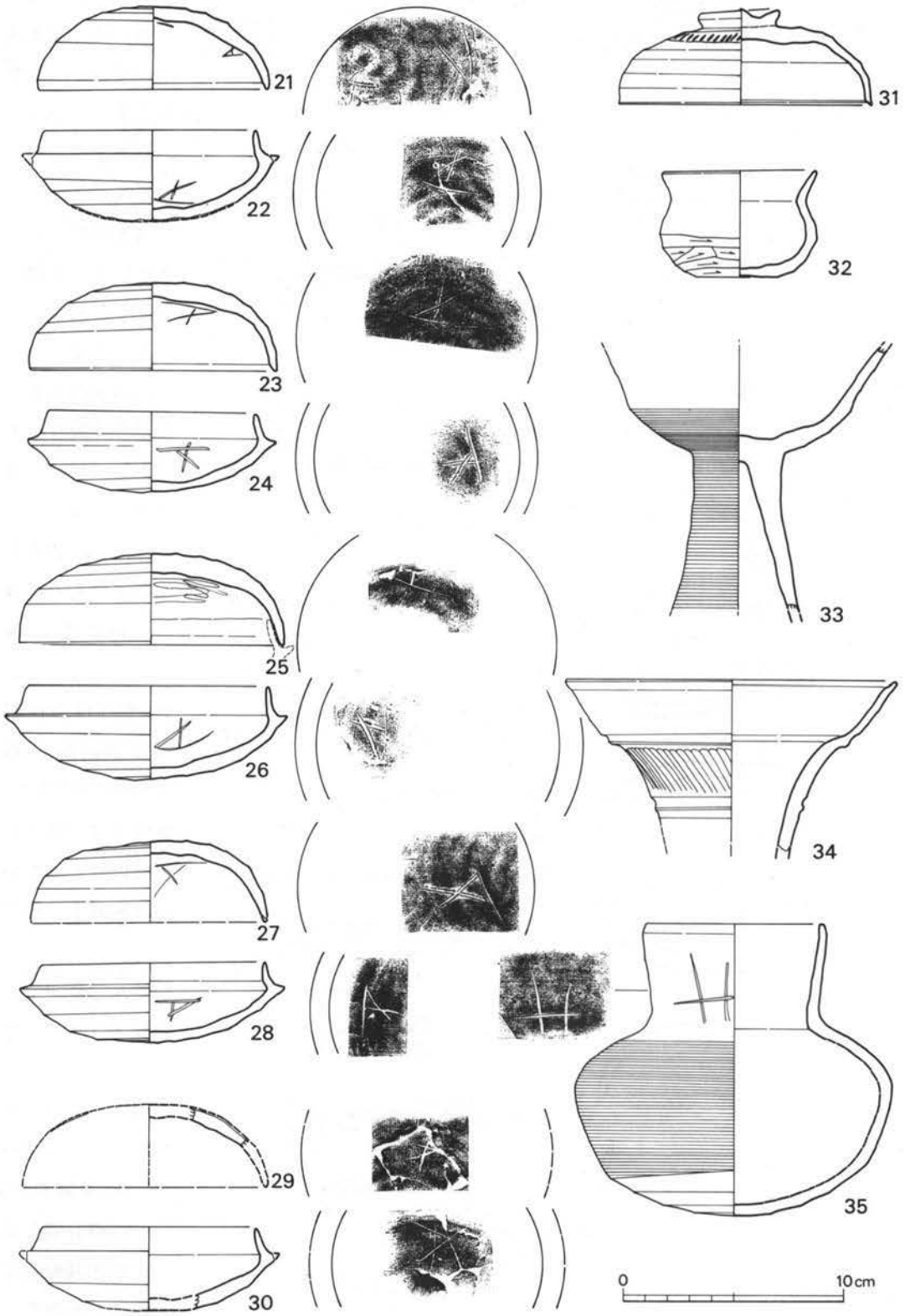
第７図　奴山33号墳出出土土器実測図①（１/３）

層の黒色土中）で他の須恵器小片・鉄片と共に検出した。19は天井部外面は中央部を除いて静止ヘラケズリを行い、中央部は削り残されている。砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色を示す。20も調整・成形等は19と同様で、ただ内面にヘラ記号を持つ点が異なる。墓道埋土中ではこの他の坏身・蓋は検出されておらず、セットとなる可能性はある。２～18と比して新しく、追葬時のものと判断される。21～30は一般に「赤焼き」と呼ばれるものである。蓋25の内天井のヘ

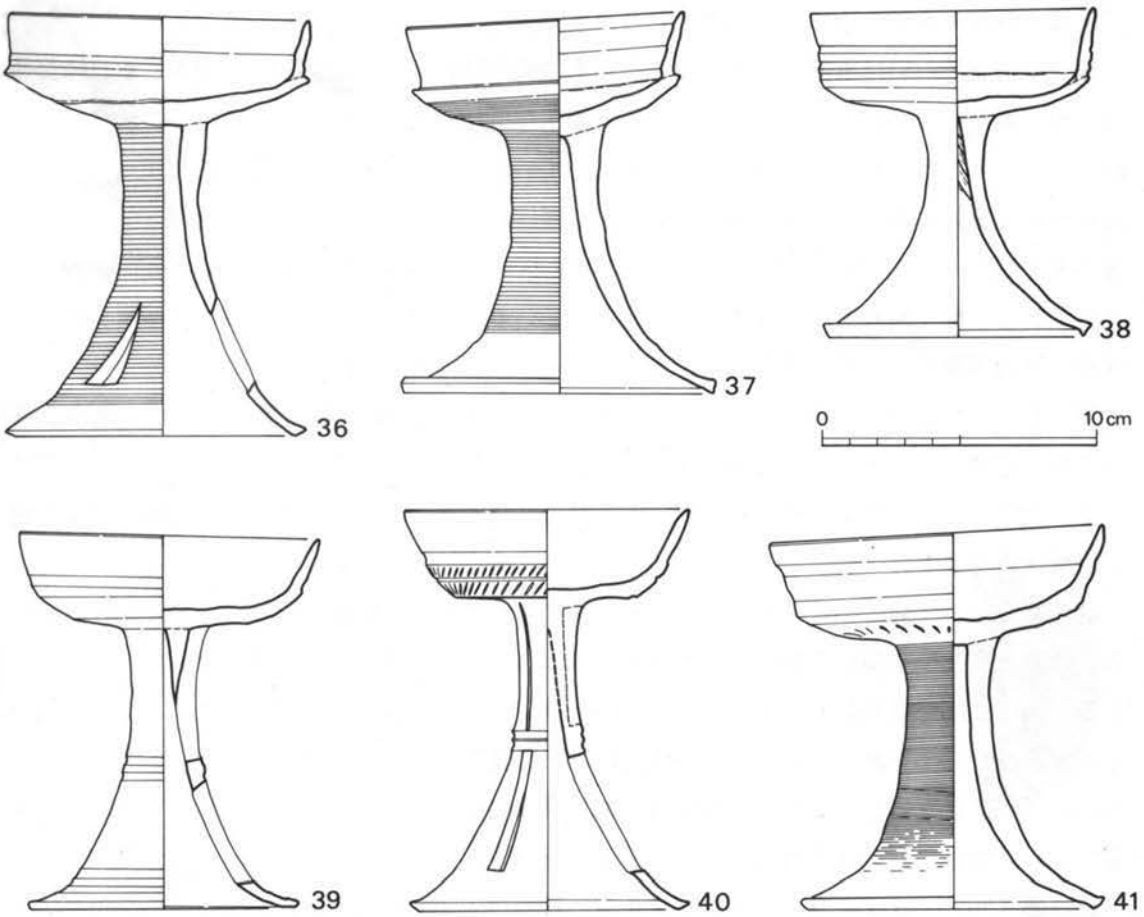


第8図　奴山33号墳出土土器実測図②（1/3）

ラ先による不規則な暗文風の施文法は一般的には須恵器に見られないものであるが、その他の成形、調整法は須恵器のそれに準じ、すべてにヘラ記号が刻されている。法量は2～18の須恵器坏蓋、身より一回り小形である。蓋は口縁部径10.2cm(21)～12cm(25)、器高4cm前後である。身は口縁部径9.3cm(24)～10.8cm(26)、蓋受部径11.3cm(24)～12.8cm(26)、器高4cm前後である。焼成は身・蓋とも土師器程ではないが須恵器よりやや軟質で端部や表面が磨滅しやすく、回転ヘラケズリで砂粒の移動方向の判明するものは少ない。ただ21・23・24・28の4個体について逆時計廻りにロクロが回転していることが判明したにすぎない。胎



第９図　奴山33号墳出土土器実測図③（１／３）



第10図　奴山33号墳出土土器実測図④（1/3）

土は小砂粒を多く含み、器面は平滑である。

高坏（33・36～41）　33･39･40は墓道左（西）側墳丘より、他は同右（東）側墳丘で検出した。33は明茶色で橙色に近く焼成は良いが36～41に比べて軟質で、いわゆる「赤焼き」と思われる。坏部下半～脚部にかけて荒いカキ目調整を施し、調整法や器形の上からも土師器とは異なり、完全に須恵器の要素を充たしている。39は口縁径11cm、器高12.8cm、脚裾径9.9cmを測る。長方形２段透し孔が２ヶ所にはいる。上段の透し孔は完全には穿たれず、下半部が貫通するにすぎない。40は口縁部径10.4cm、器高14.5cm、脚裾径10.2cmを測る。３ヶ所に方形２段透し孔がはいる。上段の透し孔の切り込みは器肉の中程までで、内側まで切り込まれず貫通しない。幅も狭く５mm程である。39・40は坏部下半に施文の有無の差はあるが作りは同様で共に小砂粒を多量に含み焼成良好にして堅固で灰色～暗灰色を呈し、灰をかぶっている。36～38・41は各々、口縁径11.2cm･10cm･10.3cm･12cm、器高15cm･14cm･12cm･14cm、脚裾径11.2cm･11.2cm･９cm･10.3cmを測り、41が脚裾２/３を欠失する他は完形かそれに近い。36は長三角形透孔を３ヶ所に配す。36・37は坏身の蓋受部の如く坏身中位に鍔状のものが巡る。割れ方よりみてこの部分は粘土の接合面だと想像される。38は坏部中位に凹線に近い沈線が３条巡り、他の３個体はカキ目調整を施している。総じて胎土に小砂粒を多量に含み、41をのぞいて焼成良好にし

て堅固で硬質である。色調は灰～黒灰色を呈する。

蓋（31・48）　31は玄室内で検出し、短頸壺の蓋と思われる。口縁部1/3を欠くが口縁部径11.5cm、器高4.3cmを測りツマミを有し、その周囲に櫛による刻み目を一巡させる。天井部は回転ヘラケズリされ、ロクロは時計方向に回転している。口唇部に古式の特徴を有する。胎土に大粒砂粒を多量に混入し、焼成良好で硬質、外面は暗灰色、内面は淡紫灰色を呈す。48は長頸壺の蓋で49とセットになると思われる。口縁部径7.6cm、受部径11.4cm、器高4.3cmで、天井部をカキ目調整し、他は回転ナデ、ナデにより仕上げている。小砂粒多く、焼成良好で堅緻、内面紫灰色、外面黒灰色を呈す。受部には、壺に蓋をセットして焼いた痕跡がのこる。

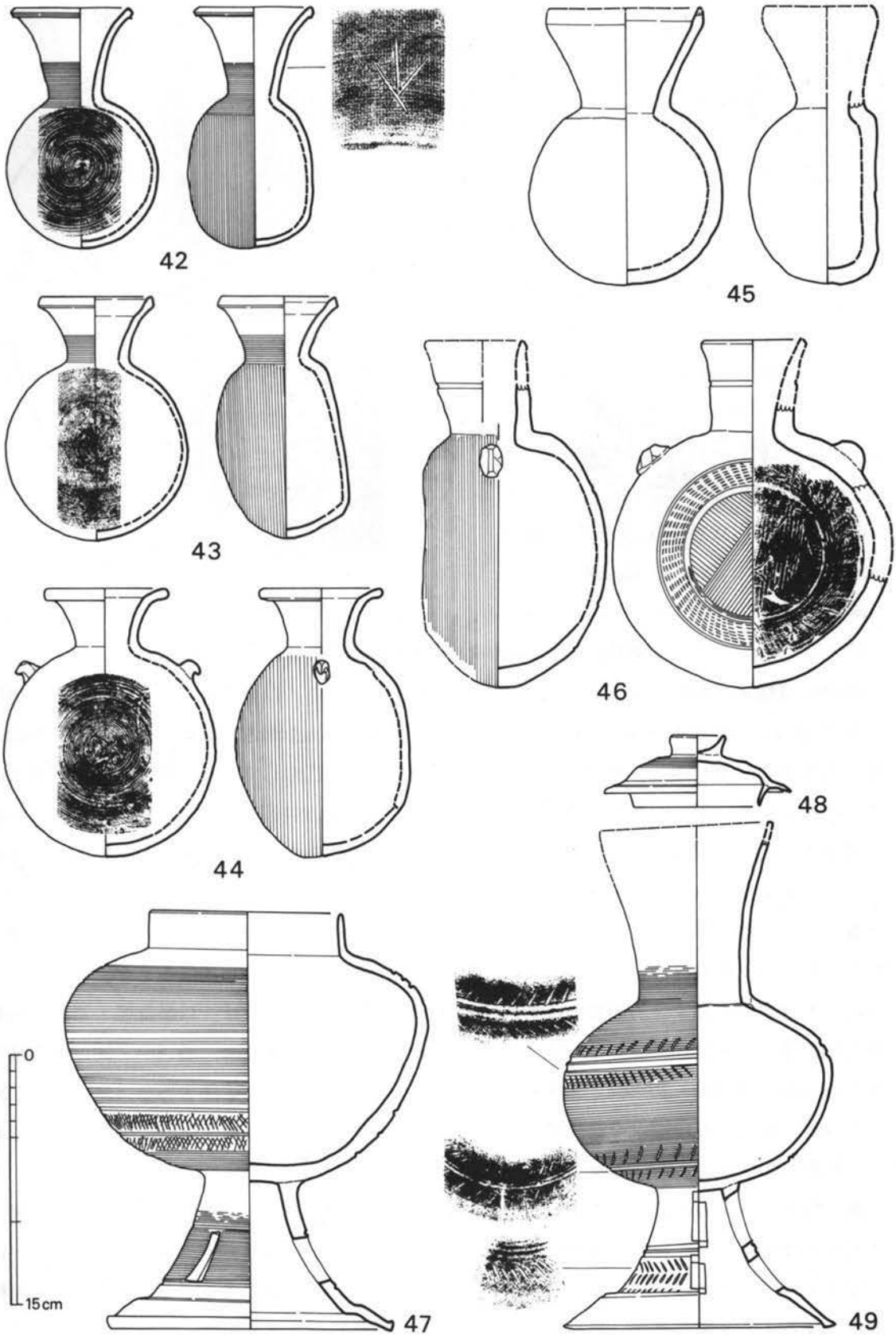
坩（32）　口縁部を若干欠失するが、口縁径7cm、器高4.8cm、胴部最大径7cmを測る。体部下半～底部は静止ヘラケズリを行う。体部上半～口縁部内外面は回転によるナデ、内底面はつよいナデを行う。多量に砂粒を含み、灰をかぶり器面がザラつく。焼成良好で堅固で黒灰色・淡黄灰色を呈す。

瓶（34・50）　34は小片のため、反転復原したものである。復原口径15cmの割と大形品である。頸部上半は櫛を細かく動かして施文している。小砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色を呈する。50はほぼ完形の俵形の瓶である。口縁部径14.5cm・器高26cm・胴最大径19.8cm・側面からの胴部径17.3cmを測る。頸部下半は横位のカキ目調整を行い、体部は縦方向に5条の凹線を巡らせ（一巡しないものもある）掲載図の左半部は回転ヘラケズリを施している。微砂粒を多量に含み、焼成良好で硬質堅固、暗灰～黒灰色を呈する。

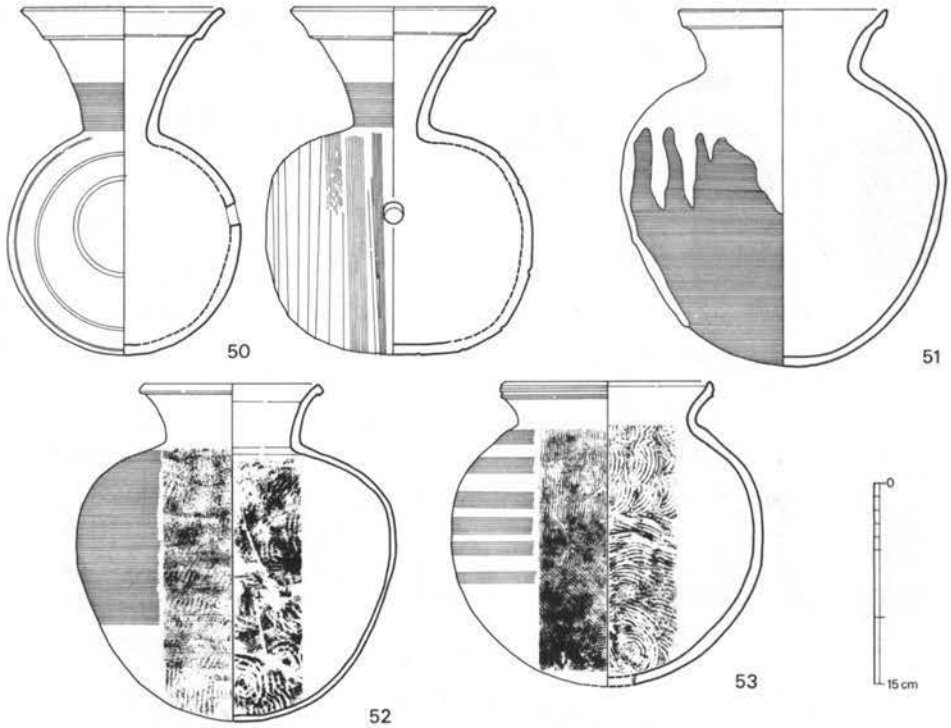
直口壺（35）　ほぼ完形で、口縁部径8cm、器高13.2cm、胴最大径14.3cmを測る。頸部にヘラ記号を刻し、体部はカキ目調整、底部は時計廻りの回転ヘラケズリを行っている。砂粒を多量に含み、焼成良好で硬質・暗灰色を帯びる。

提瓶（42～46）　45は器面が風化した淡茶～赤茶褐色を呈する土器で、いわゆる“赤焼き”と思われる。調整は不明であるが、他の4個体は一般的な須恵器で46を除いてほぼ完形である。カキ目調整がなされ、42は頸部にヘラ記号を有する。法量は口縁部径・器高・胴部径の順に記せば、42は7cm・14.6cm・9.3cm、43は6.5cm・14.7cm・11.1cm、44は7cm・16.2cm・13cm、44は復原推定値で6.5～9cm・16.6cm・11.8cm、45は6cm・21cm・16.7cmである。45以外は小砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈し、42は一部鉄銹色をおびる。

脚台付短頸壺（47）　破片が33・34号墳双方から出土している。あるいは本来は34号墳のものかも知れない。全体の1/4を欠失するが、復原口縁部径11cm、器高25cm、胴部最大径21.8cm、脚裾径16.8cmを測る。口縁部はほぼ直立し、肩および体部下半に3条のヘラ描き沈線を巡らす。沈線相互の間隔は体部下半の方が広く、沈線同士の間にヘラによる刻目文を施す。脚部には方形透孔を3ヶ所に配し、肩の沈線と透し孔の間はカキ目調整を行う。他の部分は回転によるナデおよび不定方向のナデ調整を行っている。小砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で茶灰色を呈す。なお肩に蓋をかぶせて焼いた痕が残る。



第11図　奴山33号墳出土土器実測図⑤（１／４、42のヘラ記号の拓影は１／２）

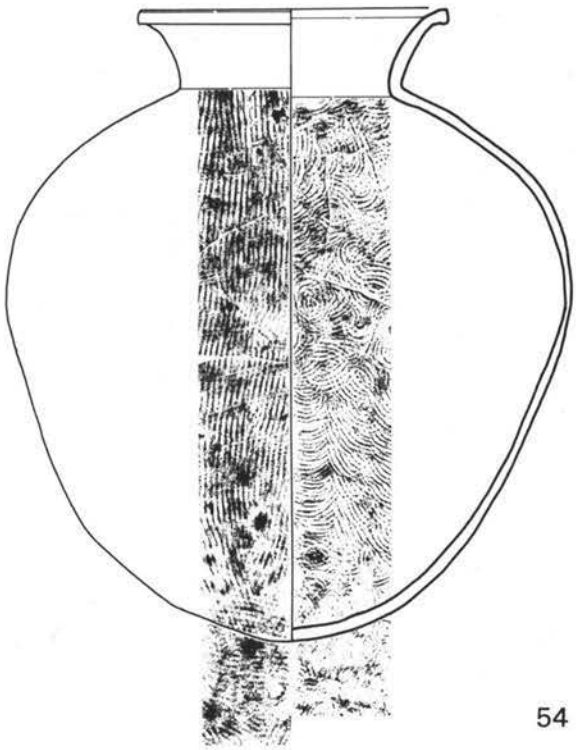


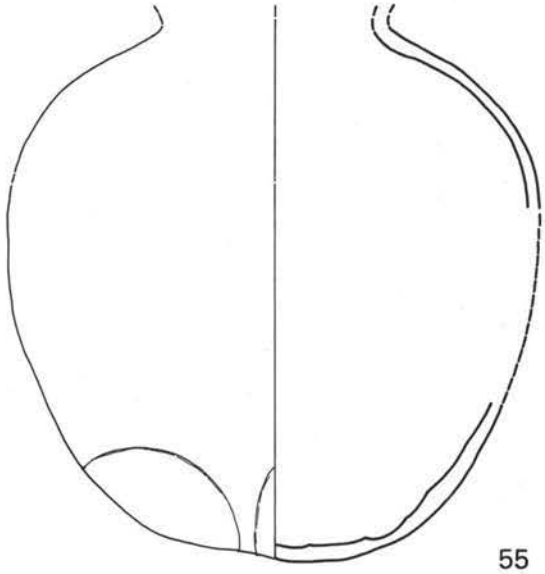
第12図　奴山33号墳出土土器実測図⑥（1/6）

脚台付長頸壺（49）　48の壺とセットとなる可能性がある。口唇部付近を欠失するが、復原口縁径10.5cm、器高30.3cm、胴最大径16.3cm、脚裾径15.1cmを測る。体部には肩部下を胴部下位に各2条の凹線が巡り、凹績をはさんで櫛による刻目を巡らしている。脚部は長方形の2段透し孔を4ヶ所に配し、各下段透し孔の間に櫛による3段の刻目巡らしている。頸部下位から体部全面にカキ目調整を行っている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好にして堅固で灰をかぶり、暗灰～黒灰色を呈する。

壺（51～53）　51・52は略完存、53は全体の1/3程からの復原図である。おのおの口唇部の形状を異にし、体部は53が球形、51・52が底部が若干細くなる等の小異はあるが、タタキの上からカキ目調整を施す等の調整や成形技法はほぼ同一である。法量は、口縁部径・器高・胴部最大径の順に記せば、51は15cm・26.5cm・24.5cm、52は13cm・25.2cm・23.8cm・53は復原推定値で15.2cm・22.8cm・23.4cmである。52は入念なタタキが施され、体部の器壁は薄く厚さ5mmである。3個体とも砂粒を多量に含み、53は焼成やや軟質だが他は焼成良好で堅固・硬質である。色調は53はよごれた淡茶色、他は暗灰色を基調とする。

甕（54・55）　54は若干欠失するが口縁部径23.5cm、器高49.2cm、胴部最大径44.3cmを測る体部外面は平行タタキ目、内面は同心円圧痕が残り、口頸部は回転ナデ調整を施している。器壁はうすい55は全体の1/4弱程からの推定復原図であるが、底部は完存する。法量は54と同程度だと思われる。体部外面は平行タタキ目の上から間断的なカキ目調整、内面は同心円圧痕が観察され、特に底部の圧痕は強く、凹凸がはげしい。外底面は、径14cm程度の円形痕が残って





第13図　奴山33号墳出土土器実測図⑦（1/6）

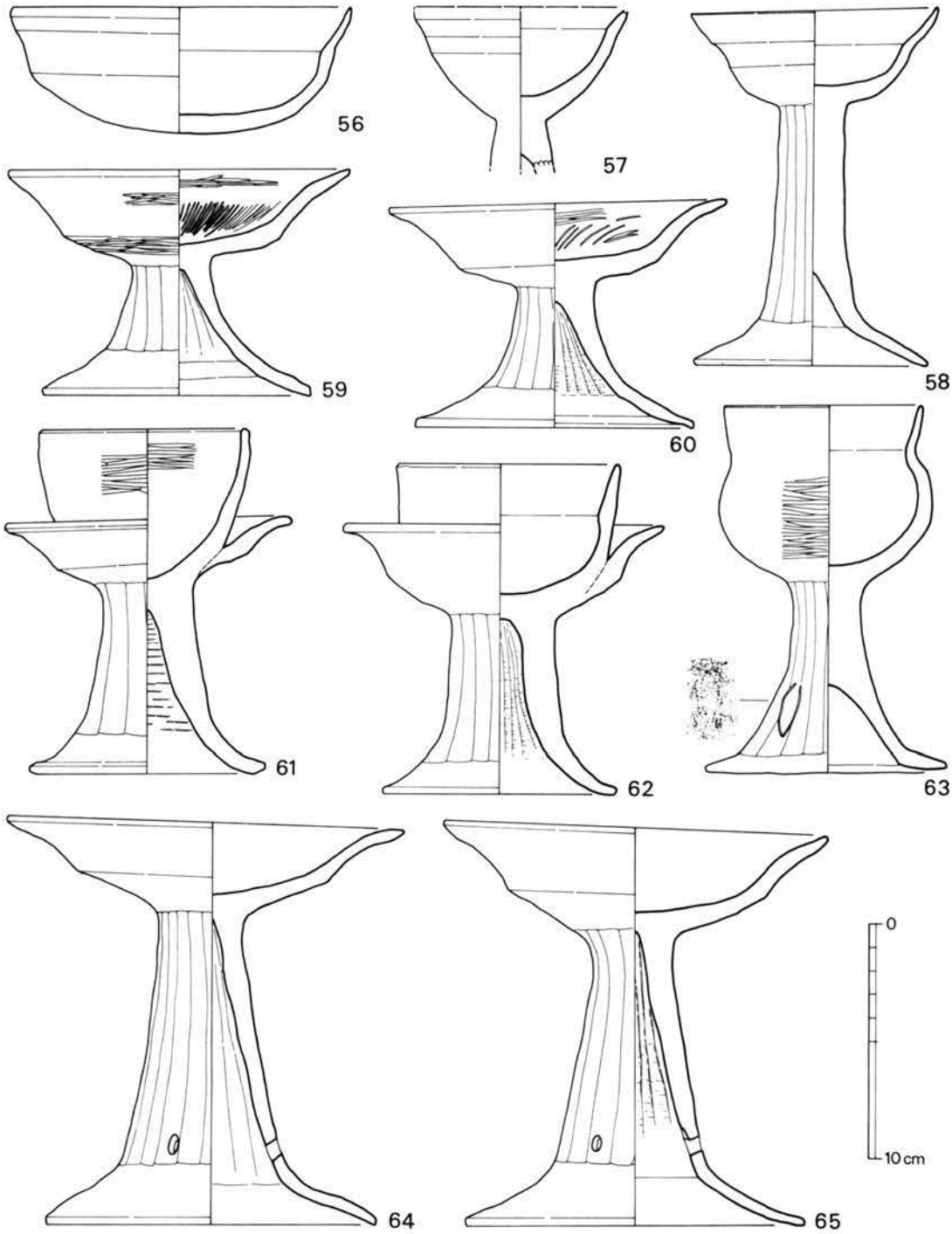
おり、坏蓋5個を反転し、焼台として利用したようである。54・55共に砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈す。

土師器（図版8・9、第14図）

埦（56）　ほぼ完形の土器で口縁部径14.4cm、器高5.4cmを測る。器面が荒れて調整は明確ではないがヘラミガキは施されていないようである。白色砂粒をかなり含み、焼成良好で暗赤茶色を呈する。

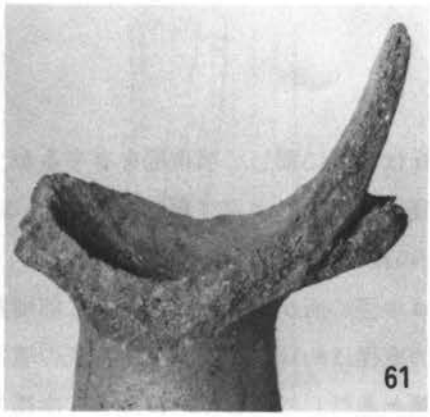
脚付埦（57・58）　57は小破片で反転復原図である。口唇部を欠くが、口縁部径9cmに復原され、現存高6.7cmである。脚部は中空で、エンタシス状に近い形態の脚柱がつくと思われ、埦というより鉢に近い形のものが上に乗る。器面は剝落して調整は不明である。砂粒を多く含むため、焼成良好だが、もろく、赤茶色を呈す。58の埦自体は56を小形化した形態で、中実の脚が付く土器である。口縁部径10.5cm、器高15.2cm、脚裾部径10cmをはかる完形品である。脚部外面はタテ方向のヘラケズリがなされるが、他の部分は磨滅して調整は判然としない。微砂粒子を多く含むが器面に砂粒は目立たず。焼成は普通程度で茶褐色を呈す。

高坏（59・60・64・65）　59・60の器高が低く坏部径との比率が異なるタイプと、64・65の器高が高く坏部径との比率が等しいタイプの二者が存在する。59・60は口縁径は共に14.5cm、器高9.5～9.7cm、脚裾径は59が11.2cm、60が12cmである。両者とも坏内面はヘラミガキを行い、外面は59がヘラミガキ、60はヨコナデを行



第14図　奴山33号墳出土土器実測図⑧（1/3）

い、外面は59がヘラミガキ、60はヨコナデを行っている。脚裾はラッパ状に大きく開き、タテ方向にヘラケズリを行っている。脚内面もヘラを回転させることによって削っている。両者とも小砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈す。64は口縁部径17cm、器高17.2cm、脚裾部径14cm、



第15図　奴山33号墳出出土師器

65は同じく16.5cm、17cm、14.5cmを測る完形品である。脚柱部下位に円形透し孔を3ヶ所に配す。脚柱外面はタテ方向のヘラケズリを、内面はヘラを回転させることによって削っている。器面は風化が進んで調整は明瞭ではない。胎土に小砂粒を含み焼成良好で茶褐色を呈す。

脚付坩（61～63）　61・62は異形の土器で坩のまわりに鍔状に粘土をはりつけ、器台と坩が組み合わさった形をしている。61は坩口縁径8.6cm、坏部口縁径12.1cm、全器高14.7cmをはかる完形品である。坩は内外面ともヨコ方向のヘラミガキを行い、脚柱外面はタテ方向にヘラケズリを、内面はヘラ回転によりケズっている。器面は全体に平滑に仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈す。62は坩口縁径9.3cm、坏口縁部径13.5cm、全器高14cmをはかる。ヘラミガキがなされていない点をのぞけば、成形・調整・胎土・焼成・色調は61と同様である。63はただ脚が付くだけである。口縁部径8.3cm、脚裾部径10.2cm、器高15.6cmをはかる完形品である。坩体部外面はヨコ方向のヘラミガキを施し、他はヨコナデおよびつよいナデ調整を行っている。脚部は上半部は中実で外面はタテ方向のヘラケズリを施し、下位にはヘラ記号を有する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。

註

1. 福岡県文化財保護指導委員永島俊一氏の御教示による。しかし、鉄刀は出土しなかった。
2. このように玄室天井が高く玄室横断面の石積みが“合掌形”を呈する石室は、本墳南方の須多田9号墳(津屋崎町大字須多田字立石に所在――「福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）」）をはじめ福間町手光古墳群、宗像町東郷1号墳（別名スベットウ古墳、波多野晥三他「東郷遺跡群」1967）等々においてみられ、宗像郡特有の石室と思われる。
3. 本墳構築の時期は墳丘内で検出した供献土器群の諸特徴から、いわゆるⅢA期的な特徴を残しながらもⅢB期に比定できる。また、墓道埋土中の黒色土層の土器はⅣ期に相当する。よってこの期間に玄門から3～4mの部分は70cm程、玄門付近は20cm程埋まったものと思われる。

3. 奴山34号墳

(1) 墳　　丘

33号墳の南17mほどの所に構築された円墳である。墳丘は北側に扁して墳頂部を有するが、これは墳裾変換線と石室のあり方からみると盗掘ないし盛土の流失によって扁したものである。見かけの直径10m強、高さ1.7mほどを測るが、墳丘調査の結果、次のような結果を得た。

まず石室の場所を決定したあと、その中心点より約5.3m半径の所が裾部となるように旧地表をカットして整形し、テラス状部をつくる。従って本墳の直径は約10.6mを測り、本来の墳丘の中心部と石室の中心とは一致している。次に石室の構築と並行して灰黄色・黄褐色・赤褐色を呈する粘質土をもって盛り土を行っていく。これは現況での盛土の流失と盗掘とを考慮しつつ、石室の推定復原高からさらに推しはかると、墳裾から2m強の盛土を行ったと思われる。基本的に33号墳と同じ構築法をとりながらも規模は33号墳の方が大きい。

墓道の西側墳裾部は整形の際に幅広く浅い溝状としているが、石室奥壁後背部の方は痕跡的なもので、墓道東側の方には認められない。本来、周溝として意識されたなどというものではありえず、旧地形との関係で溝状となったものであろう。幅2.7m、深さは10～20cmくらいである。

墓道の東側では前述テラス状部に須恵器・土師器の一群があり、西側ではテラス状部と溝状の中に須恵器の一群があった。

(2) 石　　室

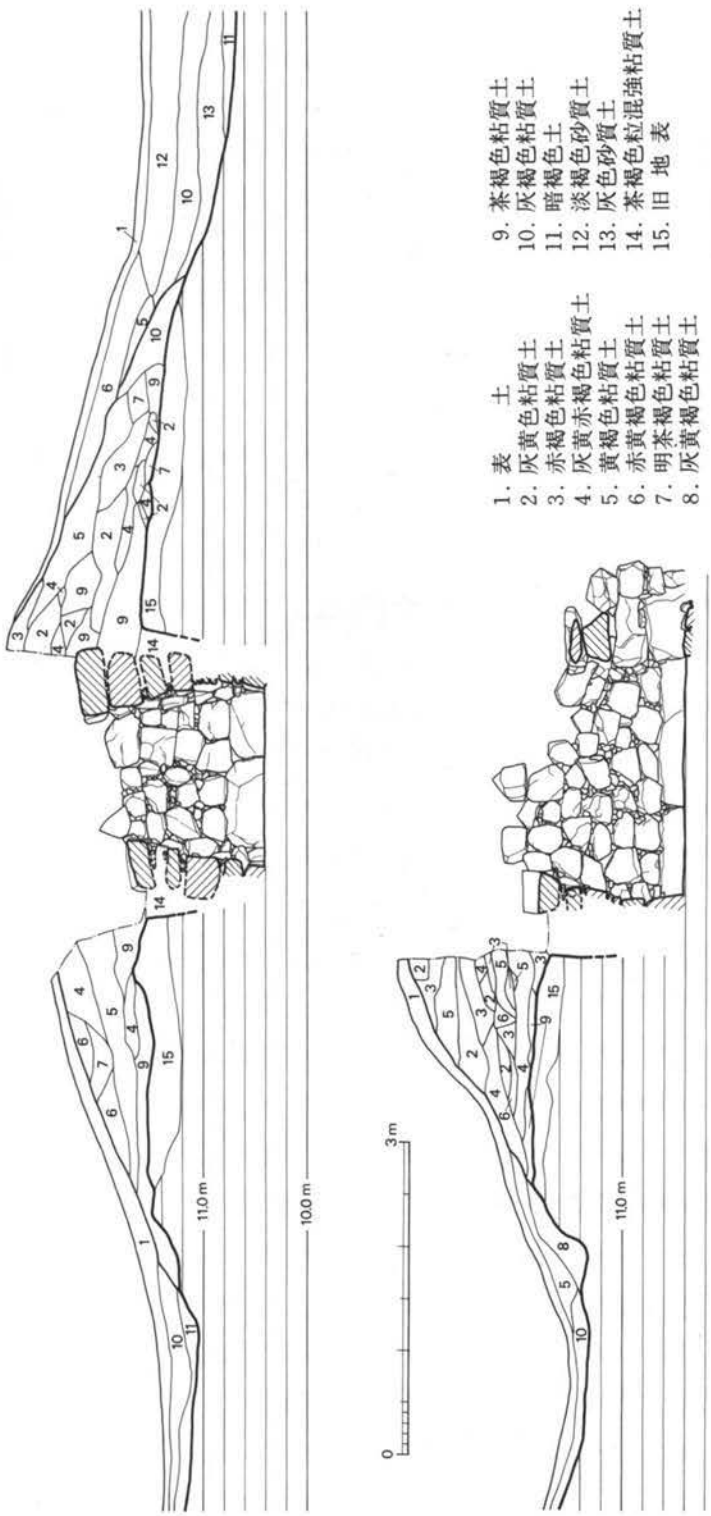
33号墳と同様南東に開口する単室の横穴式石室である。盗掘により天井部は全く存しないが、残存部よりおおよその石室規模は復原しうる。

玄室は奥壁幅1.65m、前壁幅1.45m、右壁長2.4m左壁長2.15mを測り、ほぼ羽子板状に近い長方形プランを呈している。奥壁から仕切石までの主軸長は2.3m。奥壁は大きめの石2個と小さいもの1個を腰石とし、右壁が大きなもの2石、左壁が3右をそれぞれ腰石としている。それら腰石の上にはほぼ同じくらいの大きさの石（20～40cmの不整形の面長のもの）を小口積みにし、石と石の隙間は小石をもってパッキングしている。この積み方は前壁部を除く三壁ともほぼ共通している。前壁は右袖石1個、左袖石2個の上に更に1段の石積みをし、その上に構長の大きな楣石を架構して玄門とする。この楣石から上の石積みは他の三壁と同様と思われる。

石室の高さは残存部で床面より最高1.7mを測るが、壁面の持ち送りを延長して推定復原すれば、床面から2.5mくらいになろう。33号墳の小形版ともいえるものである。

床面には径5cmに満たぬ大小の玉砂利をほぼ10cmの厚さに敷いているが盗掘により荒らされている。

玄門は床面、上部とも幅0.55m、高さ0.7mを測る。玄門幅いっぱいの扁平な仕切石を1枚



第16図　奴山34号墳墳丘断面図（1/80）

×3.5mほどの隅円の長方形をなし、深さ1.2mを測る。

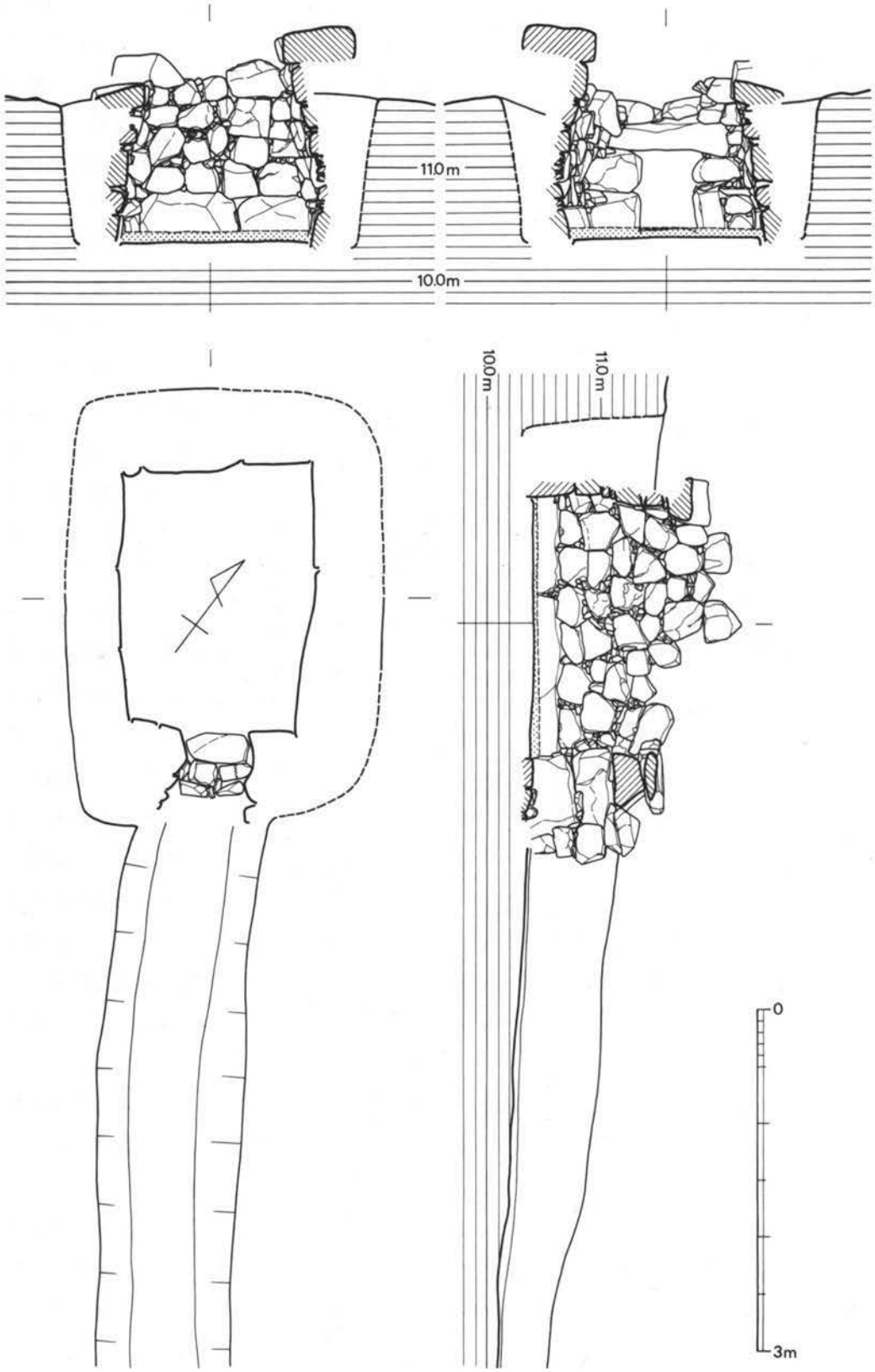
この石室の石材はほとんどが玄武岩を使用し若干の花崗岩・砂岩をまじえている。

おき、さらに前庭部の方には大小7個の石を敷いている。閉塞石はすでになく、盗掘の際に除かれたものであろう。

仕切石の前面（墓道側）は羨道といえるほどのものではなく、ここでは前庭部とするが、右側壁は1列、左側壁は2列に石を積み上げている。石の大きさは玄室壁面とほぼ同様である。

墓道は石室掘り方の続きとして掘削されているが、石室主軸よりは若干西の方にふれている。5.5mばかりの所まで確認したが、もう少しのびるようである。断面はゆるやかな逆台形を呈し、その埋土は自然堆積の様相を示す。上端幅1.2m、床面幅0.6m前後を測り、深さ0.4～0.8mで墓道入口から石室の方へと床面が高くなっていく。

石室の掘り方は2.5



第17図　奴山34号墳石室実測図（1/60）

(3) 出土遺物（図版５）

石室内外から土器・玉・鉄器が出土したが、玉・鉄器類は全て玄室内からである。土器はほとんど墓道右・左両側墳丘中ないし溝中からの出土で、若干の破片が玄室と墓道の埋土中から出土している。玄室と墓道埋土のものは墳丘中や溝中のものと接合するものもあり混入と考えられる。

玄室内　床面の玉砂利直上か、それより若干浮いて出土しているが、盗掘の際に荒らされてほとんど原位置を動いているとみなされる。装身具として土玉２、耳環１、鉄器は刀子２、刀２以上、鏃４以上、そして青銅鈴１がある。また、須恵器の脚付瓮の破片が出土している。

墓道　土器は埋土中のみの出土で、須恵器の高坏脚部破片及び周溝中のものと接合する甕の破片がある。

墓道右墳丘中　完形品と破砕されたものが混在し、33号墳ほど整然とはしていない。この中に大小の石３個があり、これで土器をたたきわったことも考えられる。須恵器12個、土師器１個が出土し、須恵器の甕の破砕が著しい。

墓道左墳丘中　須恵器３個体分が原形をほとんどとどめぬくらいに破砕されて出土した。このあり方は墓道右側と比べて対照的である。

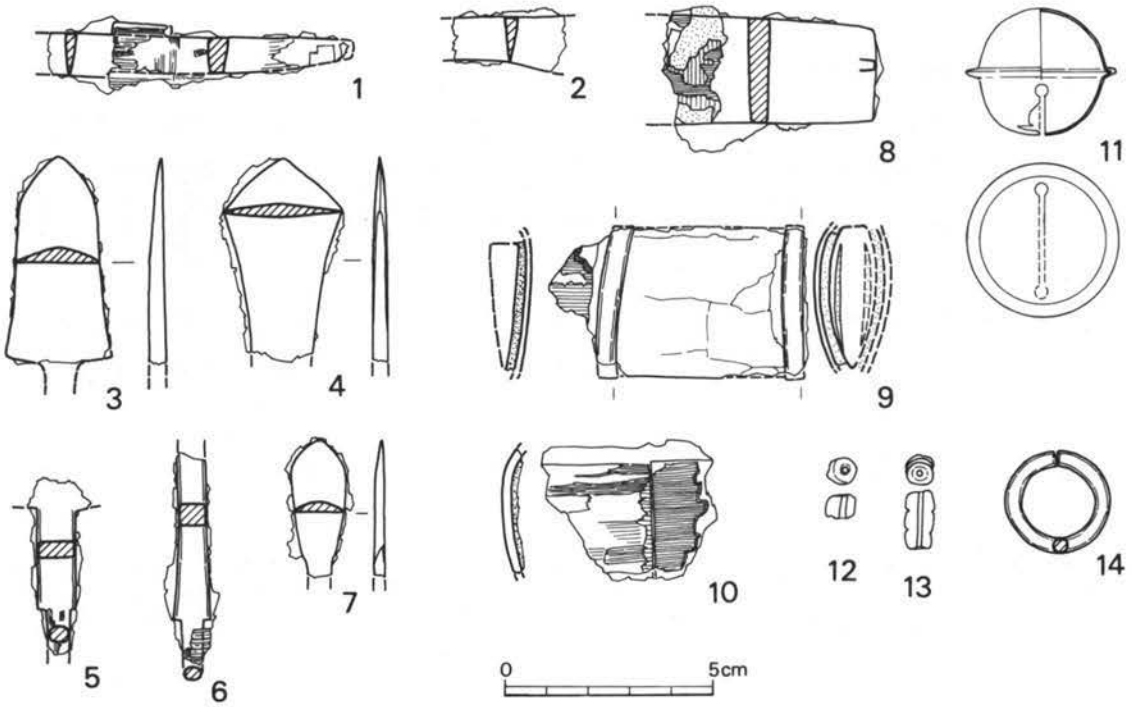
溝中　須恵器のみ14個体が出土したが、ここもかなり破砕されている。墓道と墓道左右両側墳丘中のものと接合する個体が別に３個あり、供献儀礼終了後の土器の扱い方が示唆される。

鉄　器（図版７、第18図）

刀子（１・２）ともに破片資料である。１は身の大半と茎尻の一部を欠失する片関の刀子である。現存長7.2cm、茎長5.2cm、身幅１cmをはかり、厚さは身が2.5mm、茎が５mmである。鍔金具残欠が遺存する。関部～茎全体に木質が銹着しており、木柄の一方（関部側）は鍔金具で固定している。２は身の小片である。図の左半部は幅が狭まっており、研ぎ減りしたものであろう。現存長2.7cm、現存最大幅1.3cmである。両者共に身に木質の銹着はない。

鉄鏃（３～７）　広根式の鏃身３個体分、細根式一個体分、および茎片１である。３は片丸造りで現存長５cm、最大幅2.5cmである。４は両丸造りで、山形部分だけに刃がつく。現存長4.8cm最大幅2.8cmである。５は３と同形式の鏃と思われる。６は細根式鉄鏃の茎と思われる。７は片丸造りの細根式鉄鏃で現存長3.3cm、幅1.3cmである。

鉄刀（８～10）　８は大刀の茎尻破片である。茎尻は厚さ2.5mmで薄く、関側に向かって厚くなる。木把の一部が銹着しており、茎に平行な木目の把の上から糸を巻いて固定していることがわかる。糸の上まで銹が浮き出ており、図中は点で示している。９は破片資料であるが鞘口金具である。図で右が関側で断面観察によれば鎺の途中で折れたことがわかる。寸法は現存長５cm、同幅3.7cmであり、内側に木鞘と刀子の一部が銹着している。10は鞘金具で、図の左・右の木質は異質の物であり、右が鞘、左が把に相当すると思われる。



第18図　奴山34号墳出土遺物実測図（1/2）

装身具（図版7、第18図）

鈴（11）　馬具の一部かとも推察されるが馬具は出土しておらず、一応装身具に含めた。青銅製で、部分的に破損しているが、径3cmの球形を呈し、接合時に幅3mmの鍔状部ができている。厚さは1mmに満たない。中に鉄製の径5～6mmの中子が存在する。

土玉（12・13）　黒色の光沢を発する玉である。13は3連の玉で切り離す為の切り目がはいっている。12は径7mm、高6mm程で孔の両側は特に磨いた痕跡はない。13も同様である。

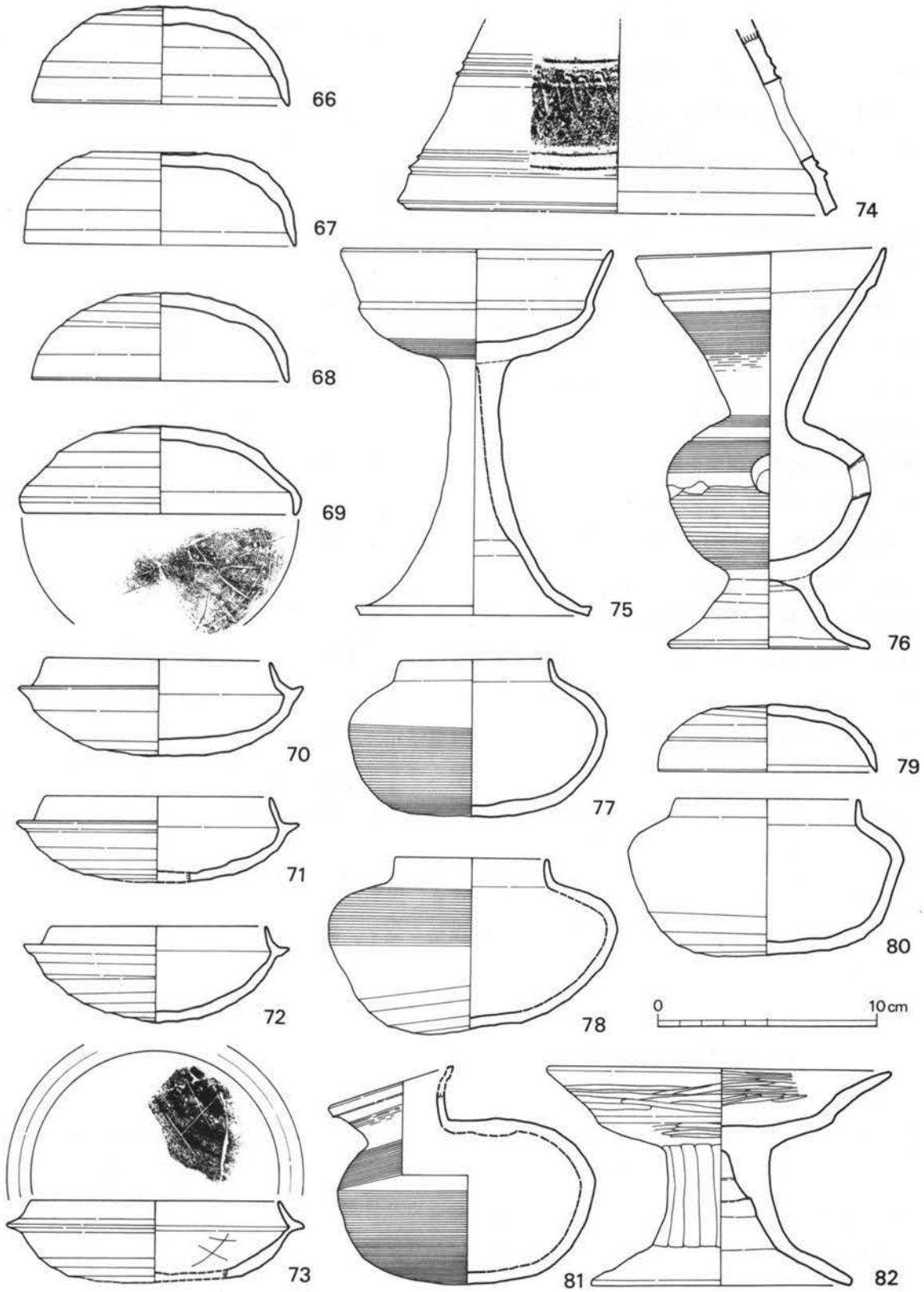
耳環（14）　外径2.6cmで断面3.～4mmの略円形を呈す。本来は金銅張りであったと思われるが、現在鉄地の部分だけしか残っていない。

須恵器（図版13～16、第19図～第22図）

坏蓋（66～69）　図示できるのは4個体分である。墓道左（南西）側の墳丘裾～周溝内から甕と共に検出した。口縁部の形態は、69は66～68より一時期新しい要素を持ち、天井内面にヘラ記号を有する。径12～13cm、器高4～4.5cmを測る。天井外面は時計廻りの回転ヘラケズリを施し、天井両面はナデ、他は回転ナデ調整を行っている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で堅固である。色調は67が黒灰色、他は暗灰色を呈する。

坏身（70～73）　70が2/3残る他は小片の反転復原である。口縁部径10cm～11.5cm、受部径12.5cm～13.5cm、器高4cm前後で72が最も小形である。外底面の回転ヘラケズリは70・72が時計廻り、71・73は逆時計廻りである。内天面はナデ、他はヨコナデによる調整を行っている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好にして堅固で、色調は総じて暗灰色を呈する。

器台（74）　小破片のため、径・傾きとも不正確である。推定値で脚裾径19cm・器高8.4cm



第19図　奴山34号墳出土土器実測図①（1/3）

をはかる。割れ口に方形透し孔が認められるが、その幅の数値や透し孔の数は分らない。透し孔の上・下に各２条の凸帯が巡り、その凸帯の間に櫛描き波状文を配する。砂粒を多く含み、焼成は極めて良好にして硬質で、灰をかぶっており白っぽい灰色を呈する。

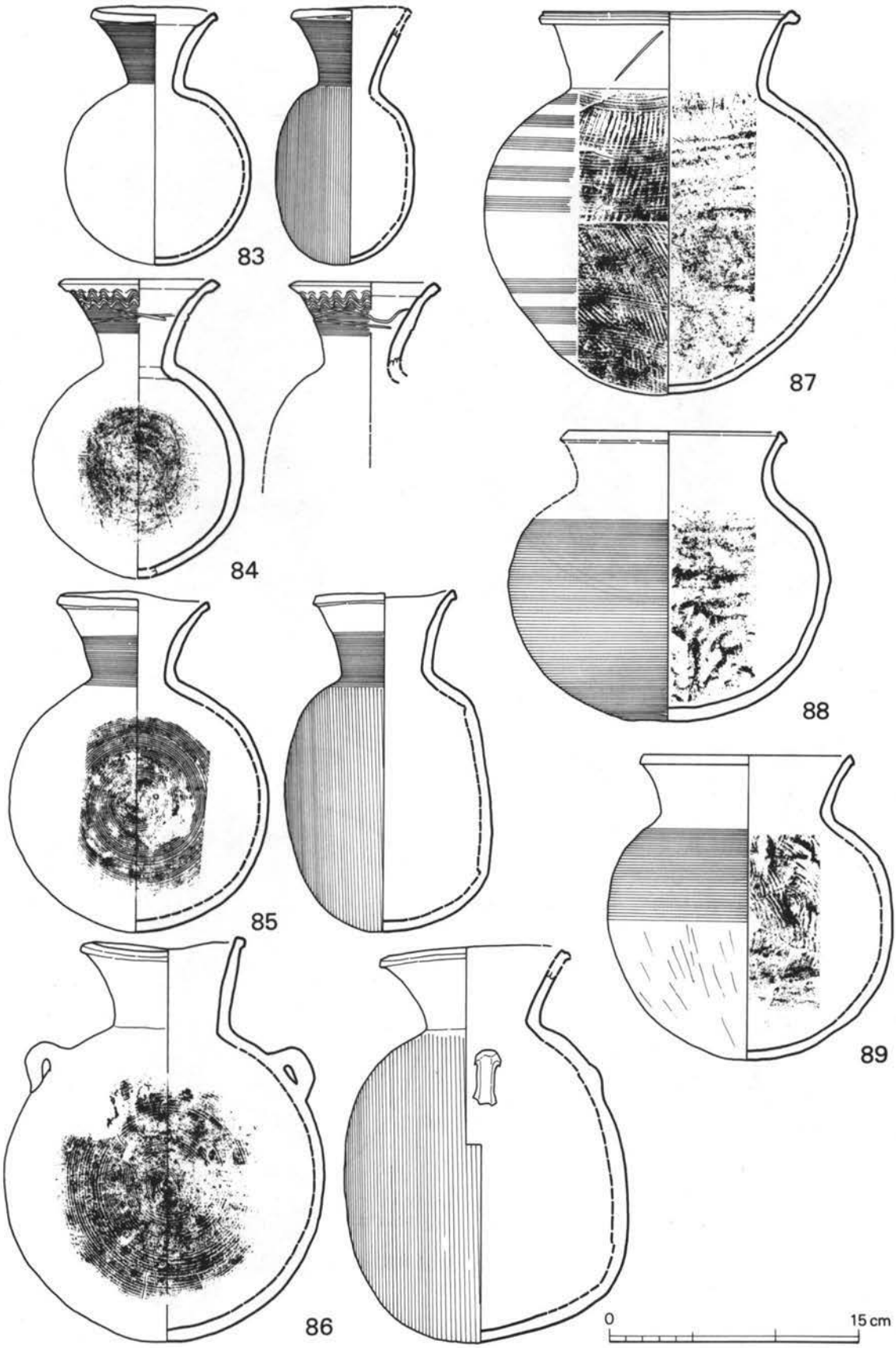
高坏（75）　４個体出土しているが完形品は本品だけで他は脚柱部だけの破片資料である。75は墓道右側で出土した無蓋高坏で復原口縁部径12.3cm、器高16.8cm、脚裾部径10.5cmをはかる。坏部中位に段を有し、外反して口縁部を形成する。坏外底部はカキ目調整、内底面はナデ、他は回転ナデ調整を行っている。胎土に小砂粒を多量に含み、焼成良好で堅固、灰色～黒灰色を呈する。

脚台付聰（76）　口縁部２/３を欠失する以外はほぼ完存する。破片が散乱し、石室埋土・墓道左（南西）側墳丘中から検出した。復原口縁部径11.5cm、器高18.3cm、脚台裾部径9.2cmを測る。体部上半に櫛による刻目を施し、その下位に一条のヘラ描き沈線を巡らす。聰の部分は基本的にはカキ目調整がなされている。胴中位はヨコ方向にヘラケズリをした部分がある。脚台部は回転ナデ調整を施している。胎土に小砂粒を多量に含み、焼成やや不良で軟質、くすんだ灰色を呈する。

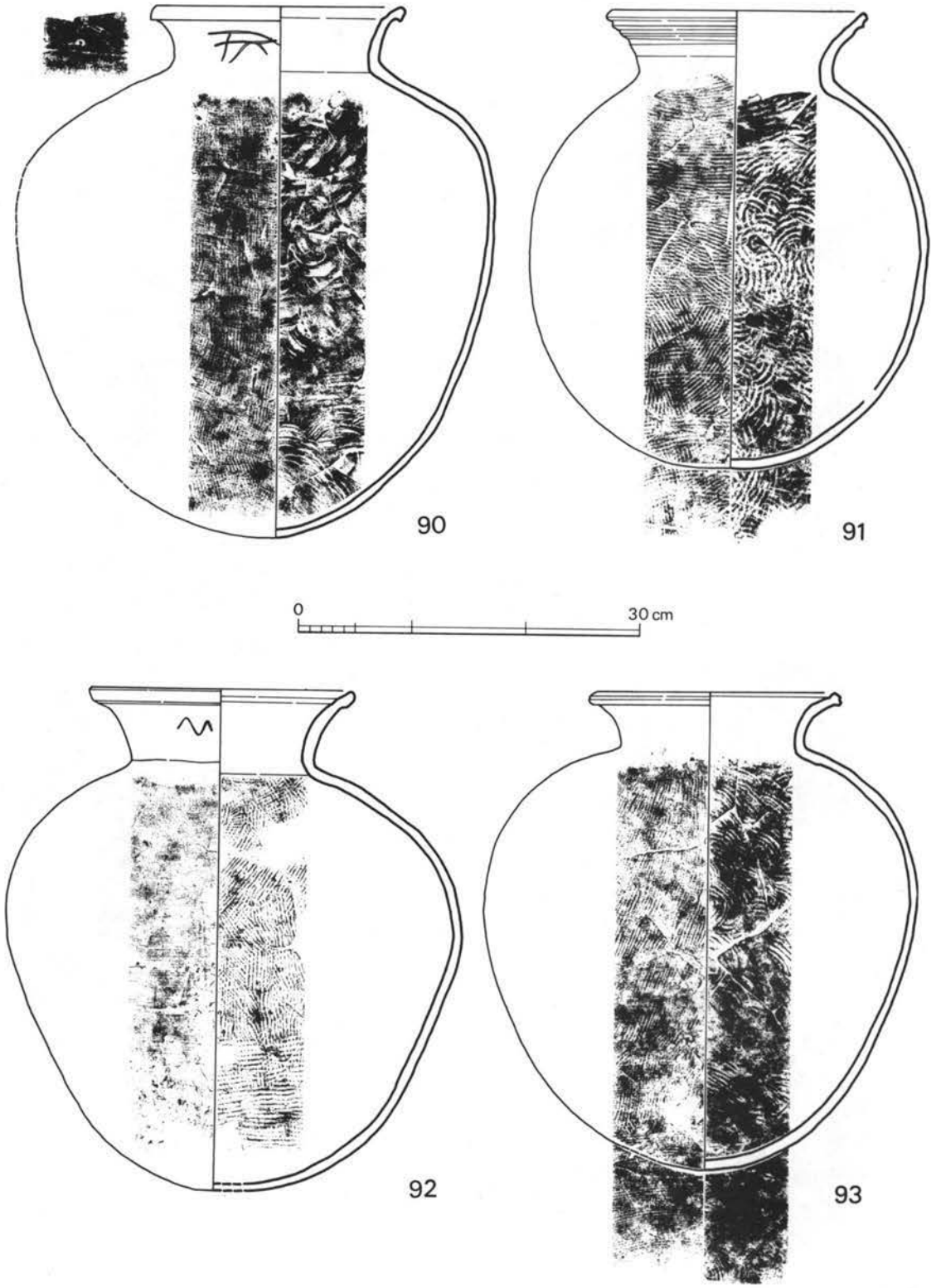
短頸壺・蓋（77～80）　すべて完形品である。78は墓道左側の周溝から甕と共に検出し、他は墓道右側墳丘内で検出したもので、79・80は蓋をした状態で出土した。77は口縁部径6.8cm、器高7.2cm、78は７cm、器高８cm、80は8.3cm、7.1cmを測る。77は肩に灰がかかって不明だが、体部はカキ目調整がなされている。78は体部上位がカキ目調整、中位が回転ナデ、下位が時計廻りの回転ヘラケズリを行っている。80は体部下半に時計廻りの回転ヘラケズリを行い、その他はナデ、回転ナデ調整を行っている。79は口縁部径10cm、器高３cmをはかり、外面にヘラ描き沈線を一条巡らす。天井外面は時計方向の回転ヘラケズリを、内天井はナデ、他は回転ナデ調整を行っている。４個体とも胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で77はくすんだ紫灰色、78ははネズミ色79・80はよごれた灰色を呈する。

平瓶（81）　口唇部を若干欠くが図上復原できる。復原口縁部径5.7cm、器高10cmをはかり、全体に丸味を持つ。頸部中位以下全面にカキ目調整を施す。砂粒多く含み、焼成良好で紫灰色を呈する。

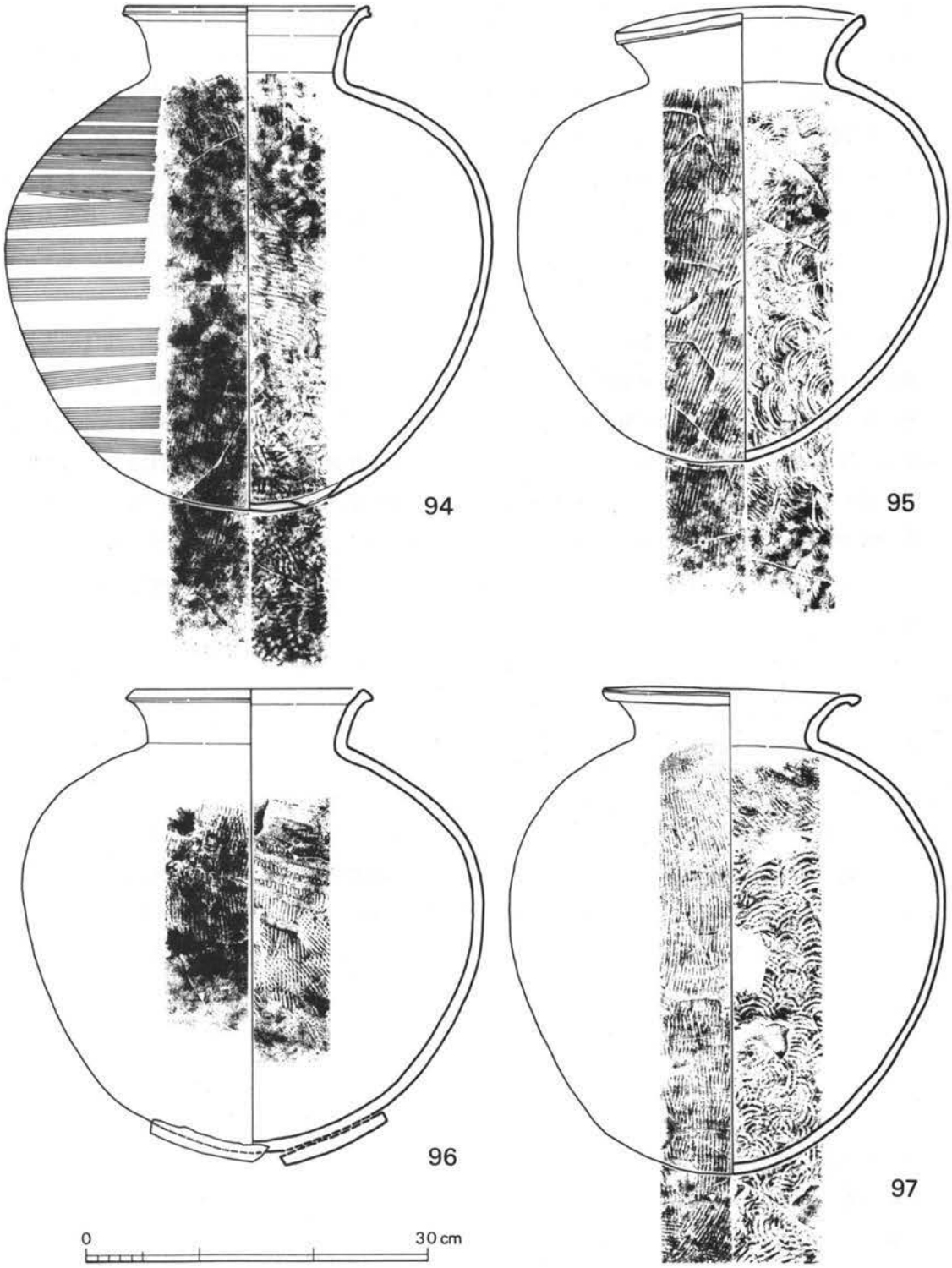
提瓶（83～86）　84は墓道左側で、検出した小片であり、他の３個体は墓道右側墳丘内から出土したほぼ完形品である。83は口縁部を一部欠失するが、復原口縁部径7.2cm、器高15.2cmを測る。口縁部をのぞく外面は細かいカキ目調整を施す。84は口縁部径8.3～9.1cm、復原器高18cmである。頸部中位にヘラ描き沈線が巡り、口縁下はヘラ描き波状文を、沈線をはさんだ上半にカキ目調整を施す。体部はタテ方向の回転ナデ調整を行っている。85は口縁部径８～９cm、器高20cm程の完形品である。頸部中位以下は入念なカキ目調整を施す。86は口縁部の一部を欠失するが口縁部径９～10.5cm、器高24cm程度をはかり、肩に一対の耳が付く。頸部は灰をかぶって判然としないが、体部外面はカキ目調整を行っている。４個体とも砂粒を多量に含み、焼成良好で、灰色～暗灰色を呈し、86は黒灰色を呈する。



第20図　奴山34号墳出土土器実測図②（1/4）



第21図　奴山34号墳出土土器実測図③（1／6）



第22図　奴山34号墳出土土器実測図④（1/6）

壺（87～89）　87・88は口縁部の一部を欠くが他はほぼ完存し、89は略完形品である。88は調査前の樹木伐開時に地表に現われていたものを地元の人が採集されたものであり、調査の結果、

墓道右側の供献土器群の一部と判明した。87は墓道右側で89は同左側の周溝内で意識的に破砕されて出土した。87は復原口縁部径15cm、胴部最大径22.5cm、器高23cmをはかる。口唇部は肥厚し、頸部にヘラ記号を有する。体部は右下がりの平行タタキ目を有し、下半部はその上からカキ目調整を施している。内面の同心円圧痕はすり消している。均整のとれた整美な土器である。88は復原口縁径13cm、胴部最大径19.5cm、器高17.5cmをはかる頸が広く短い壺である。体部外面はカキ目調整を施す。89は口縁部径12.5cm、胴部最大径17.1cm、器高18.5cmをはかり、全体のつくりは88とよく似ている。体部上半はカキ目調整を施し、下半はタテ方向にナデている。3個体とも砂粒を多く含み、焼成良好で灰色～黒灰色を呈す。

甕（90～97）　93・94は墓道右側墳丘内より、95は墓道左側表土下～盛土から、他は同左側周溝に検出した。8個体とも意識的に破砕されており、特に墓道左側周溝で検出した甕は細かく割られて散乱していた。90は口縁1/3、体部は2/3からの復原図である。復原口縁径21.5cm、器高46.5cmを測る。頸部に複雑なヘラ記号を有する。体部外面はタタキが格子目に、内面は同心円圧痕が残る。91は口縁1/2を欠失する他は略完存する。口縁部径22.1cm、器高40.2cmを測る。体部外面は平行タタキ目が内面は同心円圧痕がのこる。92は口縁部1/2、底部を欠失する。口縁部径22.6cm、器高43.8cmを測る。頸部にヘラ記号を有する。体部外面は全面にカキ目調整を施し、内面は平行タタキ目が残る。93は口縁部の1/2を欠く以外はほぼ完存する。口縁部径20.5cm、器高41.8cmを測る。体部外面はタテ方向併行タタキ目の上からカキ目調整を施し、内面は同心円圧痕が残る。94は全体の2/3が残る。口縁部径21cm、器高44cmを測る。体部外面はタタキの上からまばらなカキ目調整を施し、内面は上半部が同心円、下半部が平行の板目圧痕が残っている。95口縁部1/3を欠失する他はほぼ残っている。口縁部径21.5cm、器高40.5cm程である。体部外面は併行タタキを施し肩部にはハケ目調整を行っている。内面は同心円圧痕が残る。96は口縁部1/3を欠失するが他はほぼ完存する。口縁部径20cm、器高40.5cmをはかり、底部外面に他の甕の体部破片が付着している。この破片はガラス質が表面に出ており、また灰が付着していることから「焼き台」であったものが付着したものであろう。体部外面は平行タタキ目を施す。97は口縁部の9割を欠失し、体部は略完存する。復原口縁部径22cm、器高42cmを測る。体部外面は平行タタキ目の上からまばらなカキ目調整を施している。内面は同心円圧痕が残る。

上記8個体とも胎土に砂粒を多く含み、焼成は92、95がやや軟質の他は焼成良好である。色調は基本的に暗灰色を呈するが、92が青灰色、93が黒灰色、94が茶灰色である。

土師器（図版、第　図）

高坏（82）　口縁部径15.7cm、器高10cm、脚裾端部径11.9cmをはかる略完形品である。33号墳出土の59・60は脚部が屈曲することなくその外形線はゆるやかな弧線を描くのに対して、82は脚柱部が太く、下半部で大きく外反し、安定感がある。調整は坏部内外面はヨコ方向のヘラミガキを施し、脚柱部外面はタテ方向のヘラケズリ、内面はヘラの回転によるケズリを行い、外反部内外面はヨコナデを施している。砂粒を割と多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。

Ⅲ おわりに

奴山古墳群の西端に位置する月花池南側から原田池西側にわたって所在する支群のうち、今回の奴山33・34号墳の調査により、主要地方道若松―福間線にかかる調査分（註１）と合わせて前方後円墳１基（８号墳)、円墳５基（12号・33号～36号墳）の内容が明らかになった。以下に33・34号墳を中心に問題点のいくつかについて述べ、まとめに変えたい。

石室と構築時期について

34号墳は半壊状態であったが33号墳の石室はほぼ完存状態であった。33号墳石室は先に詳述したように玄室が長方形プランを呈し、天井が高く、両側壁が著くせり出して合掌形を呈するものである。34号墳石室も両側壁の内傾度から33号墳石室と同様なものと推定される。33号墳石室の場合、両側壁頂部の間は30cm程しか離れておらず、玄室横断面は長三角形に近い台形を呈する。玄門が低くて狭い点は共通し、羨道は34号墳の場合は短くハ字形に開き前庭部的であるのに対して33号墳のそれはやや長く平行しており、構造的には34号墳に比べてより発展したものである。若松―福間線関係調査による奴山35号墳石室の羨道は34号墳に、12号墳が33号墳のそれに近似しているが、34号墳の羨道は最も未発達な構造を示している。

玄室の天井が高く両側壁せり出しによる合掌式の石室に関して石山氏は12号・35号墳について「18号（本書では奴山12号）タイプでは、…天井石の小型化と周壁の強化とを図るために、内傾させて一種のドーム状とする手法をとるにいたっている。」（註２）と報告され、両墳は半壊状態ながら本来は33号墳と同様な壁体構造をとるようである。この種の石室は宗像郡内を中心に次のようなものが知られている。

・城ヶ谷15号墳（宗像郡宗像町大字三郎丸―註３）　円墳・単室
・東郷１号墳（宗像郡宗像町大字田熊―スベットウ古墳、註４）　前方後円墳・単室
・大門５号墳（宗像郡福間町大字手光字大門―註５）　円墳・単室
・原口１号墳（粕屋郡古賀町大字新原字原口―註６）　円墳・複室

天井石まで完存する上記の石室は奴山古墳群例（註７）を含めておよそ６世紀中葉から後半の幅の中で構築されたと思われ、須恵器Ⅲ型式の時期にあたる。単室・複室の両者がある。上記石室例程には整然とした合掌形ではないが構造的にその系譜上にありかなり矮小化された例として以下の例がある。

・東郷公園内古墳（宗像郡津屋崎町大字渡―註８）　円墳、屍床があり羨道を仕切って前室をつくる。
・相原２号墳（宗像郡宗像町大字河東―註9）円墳・複室
・高木Ｂ－２号墳（鞍手郡鞍手町大字新北―註10）　円墳、羨道を仕切って前室をつくる。
・古畑古墳（浮羽郡吉井町富永―註11）　円墳・複室

天井石まで完存する報告例は上記のようである。これらは複室構造か長い羨道を有するもので先にあげた原口１号墳を除く３例や奴山33号墳とは異なり、石室構造は新しいもので石室が小形化し天井が低くなる。古畑古墳をのぞいて分布の中心はやはり宗像郡にあるようである。しかし合掌形の石室だけで古墳群を構成することはなく、福岡県北半部に一般的に見られる横穴式石室と混在しているようである。

奴山33号墳石室のような合掌形の石室の性格については石山勲氏はその他の要素をも併わせて“宗像君”との関連で述べ、津屋崎町一帯の古墳群形成の背景はバーター貿易を主体とする

いくつかの経済的基盤を想定されている(註12)。また北九州は畿内政権の朝鮮半島経営の足場として利用され、磐井の叛乱後に玄界灘に面して糟屋屯倉や那津官家等が置かれ、半島侵出の足場として畿内政権の直接統治の強化や任那の滅亡に致る半島情勢の緊迫等の政治的色彩の濃い一面を見落とすことはできないだろうと考える。すなわち、6世紀中葉頃、半島侵略の一大拠点としての「任那」防衛を目的とした渡海基地の一つと推定される（註13)。奴山33号墳石室に象徴される合掌形壁体構造の横穴式石室成立の母体となった石室を北九州で求めるのは未だ資料不足であり、よって合掌形石室成立の背景の一つにはいろんな意味での朝鮮半島との活発な往来を想定し得るのではないかと思われる。

奴山33・34号墳の時期は大まかに6世紀後半代に求められその被葬者達は間接的ながら畿内政権に支えられ、玄界灘を舞台に活躍した人々であったろうと推測する。

「赤焼き」土器について

33号墳墳丘から「赤焼き」と呼ばれる土器（註14）が出土している。器種は坏蓋・身（21～30）5セット、高坏（33）1個、提瓶（45）1個の計12個体である。これらは提瓶が淡茶色を呈して軟質な焼成であるのに対して、他は茶褐色～赤褐色を基調とし比較的硬質である。整形や調整は須恵器と同様にロクロによってなされている。しかし、一部の土器（坏蓋—25）にはその内面にヘラ先によるラセン状暗文が施されており、これは須恵器には見られない要素である。だが坏身・蓋内面のヘラ記号や高坏のカキ目は須恵器に一般的に見られるものである。また、胎土は須恵器と比べてきめが細かく砂粒をあまり含まないものである。それゆえ、低温焼成の提瓶(45)はモロくて器面は溶けるように風化している。

形態は須恵器に準ずるが、坏類は同時に出土した須恵器の坏類に比べてひとまわり小形であり、提瓶は腹部側が半球状につくられて丸味をもつのに対して背部側は全く丸味を持たず、須恵器の提瓶と比較して側面観は偏平で整形も雑で器肉が厚くシャープさに欠ける。高坏は同じ33号墳出土の須恵器(36～41)と比べて大形で坏部が深く体部が外反して口縁部が大きく開く点は異なるが、34号墳出土の高坏(75)とはよく似ており、基本的には須恵器と異なるところはない。

「赤焼き」土器を「範囲を広げて須恵器に似て非なるもので土師器とも異なる土器」(註15）とする考え方があるが、「赤焼き」という言葉が灰色の須恵器と比べて色が赤っぽいところから須恵器をベースに生まれた言葉である。本墳出土の「赤焼き」は器形的には須恵器をベースにしてつくられ、小異はあっても、整形・調整手法、ヘラ記号の刻印等は須恵器と同様である。後述するように「赤焼き」は須恵器をベースにつくられた土器であり、土師器にしかない器形で須恵器の整形や調整手法の一部がとり入れられ、硬質に焼かれたとしてもそれは土師器とすべきであろう。

次にこれらの土器の性格であるが、出土状態については高坏が墓道左側墳丘から出土した以外は第5図・表1で示すように散在せずにB群だけに集中してはいるが、置かれ方は須恵器ととりわけ異ったところはない。またB群の器種構成についても他の群と異質な要素は認めがたい。よって、出土状態からは「赤焼き」土器に須恵器や土師器とは異なった別の独立した性格を見出すことは困難である。他遺跡に目を転ずれば、福岡県粕屋郡須恵町乙植木古墳群(註16)では、2号墳墓道右側墳丘中から須恵器・土師器とともに坏身・甕の「赤焼き」が、4号墳羨道・墓道から須恵器とともに器台・壺の「赤焼き」が出土している。2号墳は古式横穴式石室を内部主体とする円墳で5世紀末に、4号墳は複室の横穴式石室を内部主体とする円墳で6世紀後半代に位置づけられている。嘉穂郡桂川町

寿命王塚古墳（註17）では出土状態に明確さを欠くが前室から「赤焼き」の坏身３個、直口壺１個が出土しており、古墳の築造時期は６世紀中葉の年代が与えられている。佐賀市金立町大字金立の大門西遺跡（註18）では、ＳＴ046古墳玄室から坏蓋１、墓道から高坏１が、ＳＴ047古墳から、坏蓋１が、ＳＴ048古墳から坏蓋１、坏身１が出土している。３基とも単室の横穴式石室を内部主体とする円墳である。これらは出土状態についての明確な記述がないのでおしまれるが、出土した「赤焼き」はおおむね７世紀後半に位置づけられている。乙植木４号墳の甕をのぞいて（註19）他の「赤焼き」土器の器形は須恵器と同様で特殊なものはない。出土位置は石室内か墳丘中で、葬送儀礼や造墓過程でのまつりの供献土器の性格を持っており、出土状態は伴出する須恵器・土師器と全く異なるところはない。また日常的な集落遺跡からある程度まとまって出土したという例は報告されていないようである。よって、「赤焼き」土器は、

1. 同時期の須恵器の器形をベースに、ロクロを使って須恵器と同じ整形技法・調整手法を用いてつくられる。一部に調整法において土師器の要素を含まないわけではない。
2. 胎土はおおむね精良できめ細かく、須恵器と比して低火度焼成を行い、赤褐色、黄褐色等を呈することが多い。

ということができよう。また、その性格については、基本的には葬送儀礼や古墳構築の過程において執り行われる“まつり”に際して使用される目的を持った土器であろうと考える。

次にヘラ記号については、奴山33号墳出土の坏にはすべて同一のヘラ記号が刻印されている。瓶・高坏は完形ではないので断定はできないが、ヘラ記号はなかった可能性が高い。また先述した乙植木２・４号墳、寿命王塚古墳、大門西遺跡の「赤焼き」の中にヘラ記号は見られない。福岡県田川郡大任町大字今任原所在の狐塚古墳群中出土の「赤焼き」の可能性ある土器の中にもヘラ記号はない（註20）。ヘラ記号のある奴山33号墳出土例についてみれば、その刻印は他に共伴出土した須恵器にみられるヘラ記号とは全く異ったものである。高島忠平・西弘海氏の「…この種の土器の比較的多く分布する九州において、一般の須恵器工人とは異った系統の工人集団の存在がうかがえる……」（註21）という発言と併せて考えると、ヘラ記号の違いが工人あるいは工人組織の違いをそのまま反映するとすればこのヘラ記号の問題は興味深い事実ではある。しかし、そのような工人集団の存在を想定するにしても、「赤焼き」土器の出土量は須恵器や土師器と比較して極めて少量であり、その工人集団は小規模なものであったろうと考えられる。また先述のように須恵器と酷似していることから須恵器の工人集団と組織的に重なり合う部分があった可能性も考えられる。

最後に基本的な問題として焼成不良の須恵器との識別の仕方である。これは「赤焼き」土器の認識にかかわる問題で、基本的には須恵器・土師器を含めた概念規定の問題とかかわってくる。今後の資料の蓄積と研究に期待したい。

皮袋形土器について

奴山33号墳墓道右側墳丘中の供献土器群の中から完形に復原される１個の皮袋形土器が出土している。この種の土器は出土例が希で出土状態や使われ方を想定できるものは少い。最近の調査で出土状態のはっきりとした例が増えてきた。福岡県内出土例として以下の例がある。

・黒部２号墳（豊前市大字松江―註22）
　東側墳丘下（墓道右側墳丘下）より２個体分が出土。６世紀末（Ⅳ期）
・見原２号墳（嘉穂郡穂波町若菜―註23）
　墳丘および周辺から須恵器・埴輪片とともに皮袋形土器と思われる１個体分の土器片が採集されている。

・川島古墳（飯塚市川島—註24）

完形１個。出土状態不明

・宮ノ辻古墳（鞍手郡若宮町—註25）

完形１個、出土状態不明。

・乃木松１号墳（朝倉郡三輪町弥永—註26）

周溝から土師器・須恵器とともに１個出土。６世紀後半頃（ⅢＢ期）

・大岩西部１号墳（甘木市堤—註27）

完形１個、石室内より鉄斧が銹着して出土。６世紀後半頃（ⅢＢ期）

・観音山古墳群中原Ⅰ群８号墳（筑紫郡那珂川町大字中原—註28）

完形１個　石室床面から出土。

・観音浦古墳群（粕屋郡宇美町　　—註29）

完形１個　墓道より出土

・高雄古墳群（筑紫郡太宰府町　　—註30）

・糸島高校所蔵品（伝福岡市西区小田出土—註31）

完形１個　出土状態不明

・三井高校所蔵品（朝倉郡三輪町森山—註32）

完形１個　出土状態不明

・伝権現塚出土（久留米市大善寺—註33）

完形１個　出土状態不明

・伊勢神宮徴古館農業館所蔵品（福岡市野芥出土—註34）

完形１個　小田富士雄氏によれば佐賀県小城郡鞍投窯跡では野芥出土品と似た土器が６世紀前半代の須恵器と共に焼かれている。

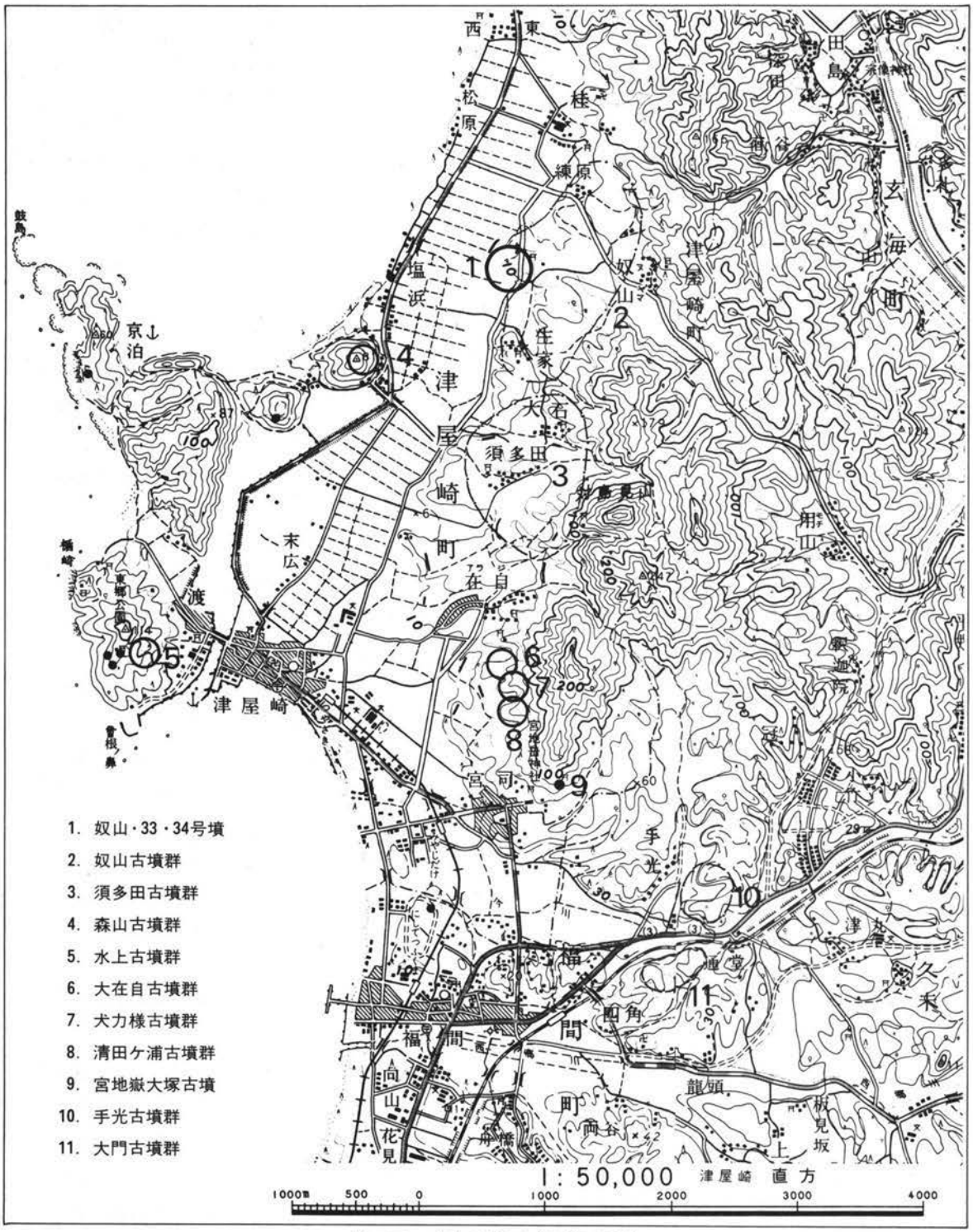
上記の皮袋形土器の所属する時期は共伴出土した須恵器からみると６世紀後半以降のものが多い。奴山33号墳出土例は皮の合わせ目や縫い目を忠実に模倣した逸品であるが共伴出土した土器はⅢＢ期の古い要素を残す時期のものである。かなり退化した黒部２号墳出土例はⅣ期の須恵器と共伴している。佐賀県鞍投窯跡では６世紀前半（Ⅱ期？）の皮袋形土器が焼かれているようで、おそらく６世紀代を通じて用いられたものと思われる。皮袋形土器自体の形態変化も他の須恵器と同様で奴山33号墳・野芥出土例は大形で皮袋を忠実に模倣するがⅢＢ期の新しい段階からⅣ期のものは皮の合わせ目や縫い目が省略される場合が多く、土器自体も小形化し鋭さを失う。

以上は筆者の知る範囲での須恵器の皮袋形土器出土例であるが、春日市赤井手遺跡（註34）から土師器の皮袋形土器状のものが出土している。赤井手遺跡は住居跡からの出土例だが皮袋形土器の多くは古墳から出土し、石室や墓道から出土する場合（大岩西部１号墳・観音山８号墳・観音浦17号墳）と墳丘盛土下～周溝から出土する場合（黒部２号墳・見原２号墳・奴山33号墳・乃木松１号墳）の両者がある。出土状態も程度の差こそあれ、意識的に破砕されて出土する場合と完形で出土する場合があるが、石室内から出土した上記３例は完形品で、墳丘盛土下～周溝から出土する場合は口縁部を打ち欠いたり（奴山33号墳）、破砕する場合（黒部２号墳・乃木松１号墳）が多いようである。出土位置や出土状態の上記の相違は被葬者個人に対して葬送過程で供献されるか、古墳構築の節目で執り行われるまつりに供されるものかの違いであり、当然のことながら各古墳の“まつり”に供される土器全体の扱われ方と深くかかわっている。この種の土器は希少であるが他の土器と特に異なった特別の扱いをされているわけではなく、提瓶の変形として、本来の皮袋と同じように水や酒を入れる容器として用いられたと思われる。それゆえに、奴山33号墳出土例をはじめ、黒部２号墳・乃木松１号墳出土例は甕や壺と同じように打ち欠かれたり、破砕されたものであろう。

註

1. 石山勲編『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書　第54集　1977
2. 註１文献28頁

3. 福岡教育大学歴史研究部考古学班『城ヶ谷古墳群』 1977
4. 波多野晥三・春成秀爾『東郷遺跡群』 1967 日本住宅公団
5. 福間町教育委員会調査。調査担当者の福岡県文化課伊崎俊秋氏の御教示による。
6. 石山勲「6、原口1号墳」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 —Ⅳ— 所収) 1974 福岡県教育委員会
7. 註1文献によれば複室で玄室高が高くなるタイプとして奴山11・21・22号墳、須多田9号墳があげられ、奴山12・36号墳石室に後続すると想定されている。
8. 波多野晥三「東郷公園内古墳調査」(『福岡教育大学紀要』 第20号 所収) 1970
なお本墳は『福岡県遺跡分布地図(宗像郡編)』(1977 福岡県教育委員会)によれば、№—350189の「彦六古墳」に対応すると思われる。
9. 酒井仁夫『相原古墳群』 宗像町文化財調査報告書 第1集 1979
10. 副島邦弘「高木B－2号墳」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 —XIII— 所収) 1977 福岡県教育委員会
11. 渡辺正気「古畑古墳と寺徳古墳」(小林行雄編『装飾古墳』所収) 1964 平凡社
12. 註1文献32頁
13. 註1文献32頁
石山勲「九州発見の環鈴について」(『古代探叢』所収) 1980
14. a 高島忠平・西弘海「寿命王塚古墳出土土器」 奈良国立文化財研究所年報 1971
b 児島隆人・高島忠平「5 王塚古墳」(『嘉穂地方史—先史編—』所収) 1973
15. 石山勲『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 —X— 1977 福岡県教育委員会
16. 註14に同
17. 註14aに同
18. 高瀬哲郎・岩永政博他「大門西遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』(1) 1980 佐賀県教育委員会
19. この壺はこの時期の須恵器に見られない土師器の器形のものであり、「赤焼き」とするよりも土師器の範囲に入れた方が適当と考える。
20. この土器が注目されだして10年の月日が流れるが、古墳からの普遍的な出土品としての地位を得てはいない、良好な資料の増加を待って、工人組織や“まつり”の中での使われ方の研究が望まれる。
21. 註14a文献48頁
22. 酒井仁夫 『黒部古墳群』 1979 玄洋開発株式会社
23. 高島忠平・浜田信也 「見原3号墳」(『嘉穂地方史—先史編—』所収) 1973
24. 藤田等 「皮袋形提瓶」(『嘉穂地方史』先史編 所収) 1973
25. 『鞍手郡郷土史』 鞍手郡教育振興会 1965
26. 新原正典 『乃木松古墳群』 三輪町文化財調査報告書 第3集 1977
27. 朝倉高校史学部 「大岩西部1号墳」(『埋もれていた朝倉文化』所収) 1969
28. 沢田康夫 『観音山古墳群』 那珂川町文化財調査報告書 第6集 1980
29. 調査担当者平ノ内幸治氏の御教示による。
30. 調査に参加した平ノ内幸治氏の御教示による。
31. 筆者実見
32. 県文化課柳田康雄氏・小郡市教育委員会片岡宏二氏の御教示による。
33. 『古代のくらしのなかの器展』 佐賀県立博物館 1978
34. 『日本陶磁全集2』(日本古代) 小学館 1979
35. 丸山康晴編『赤井手遺跡』 春日市文化財調査報告書 第6集 1980



第23図　古墳分布図（1/50,000）

図　　版

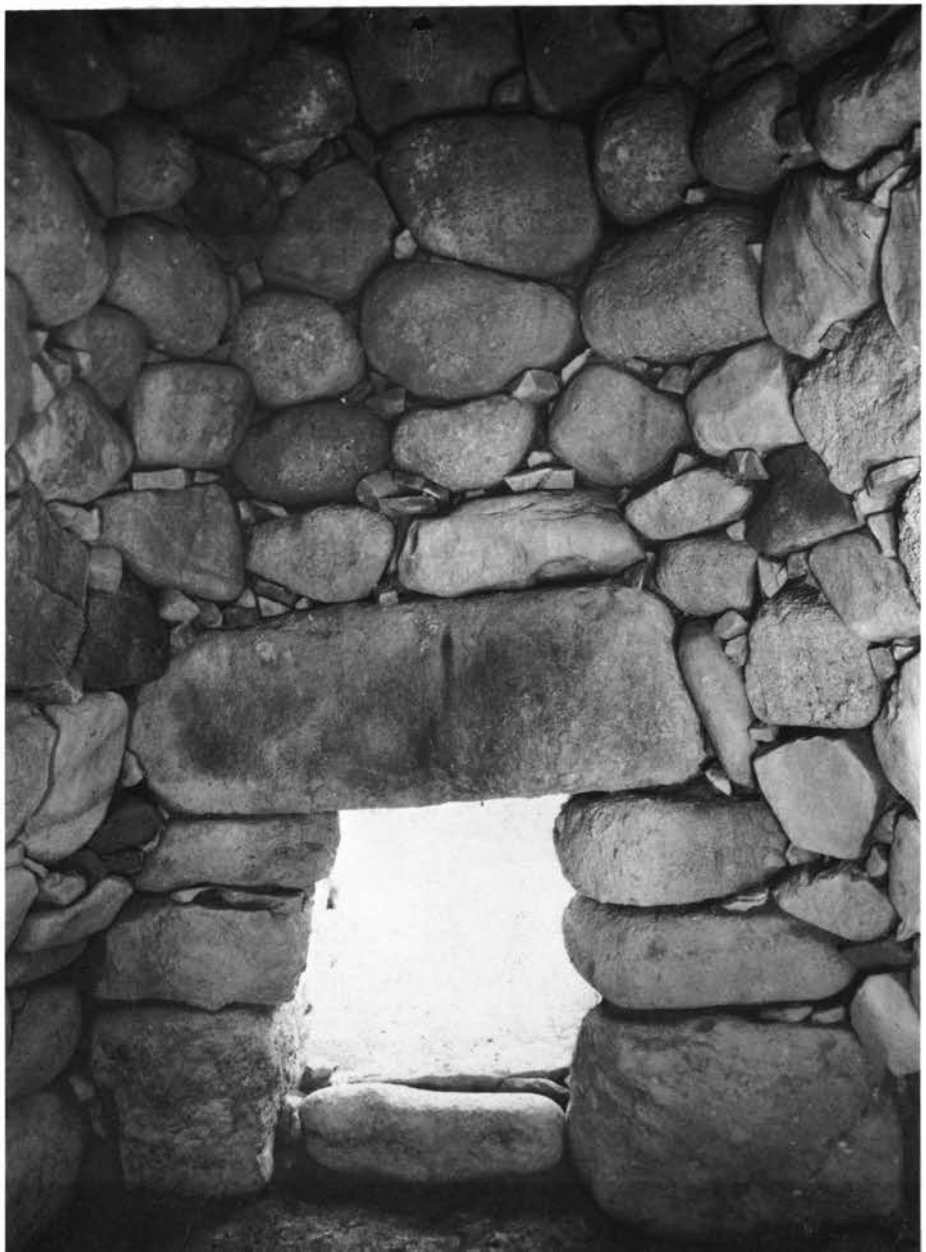
図版 1

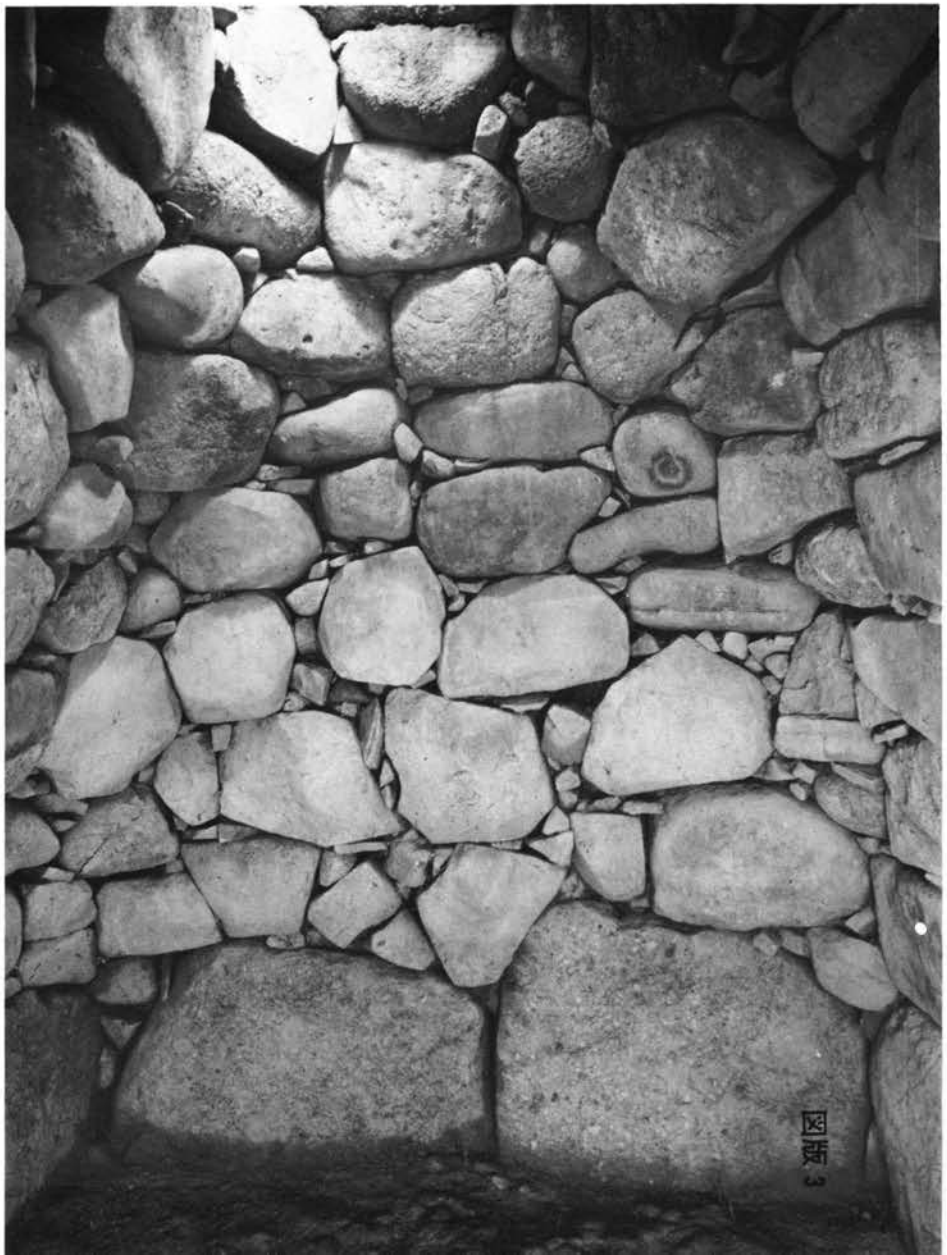
上　奴山33号（左）・34号墳（右）全景（南東から）　　下　奴山33号墳全景（南東から）

図版 2

上　奴山33号墳墳丘全景・土器出土状態　　下　同墓道から玄門を望む

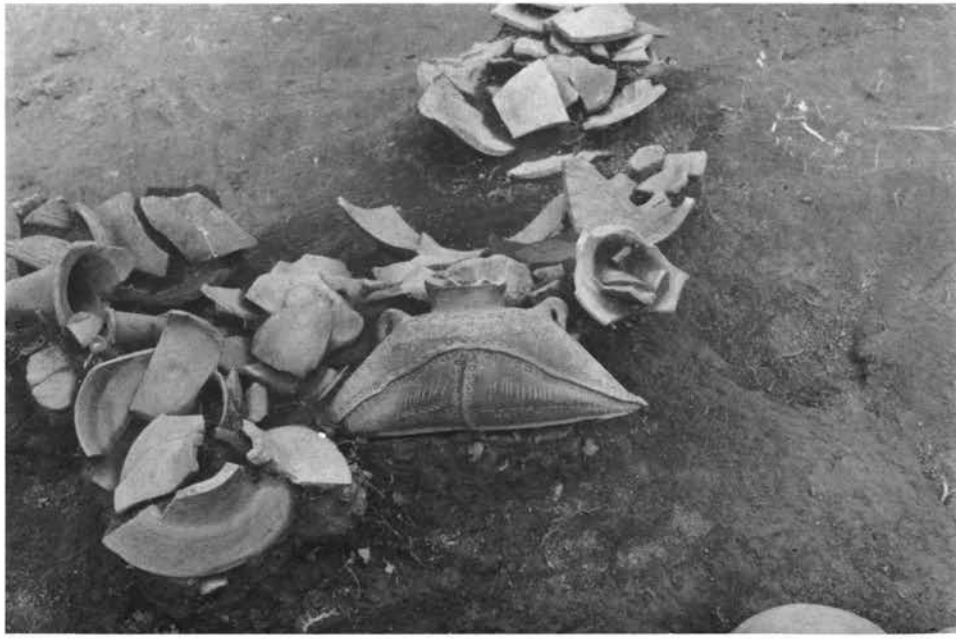
右　奴山33号墳奥壁　左　同玄門および前壁





図版 3

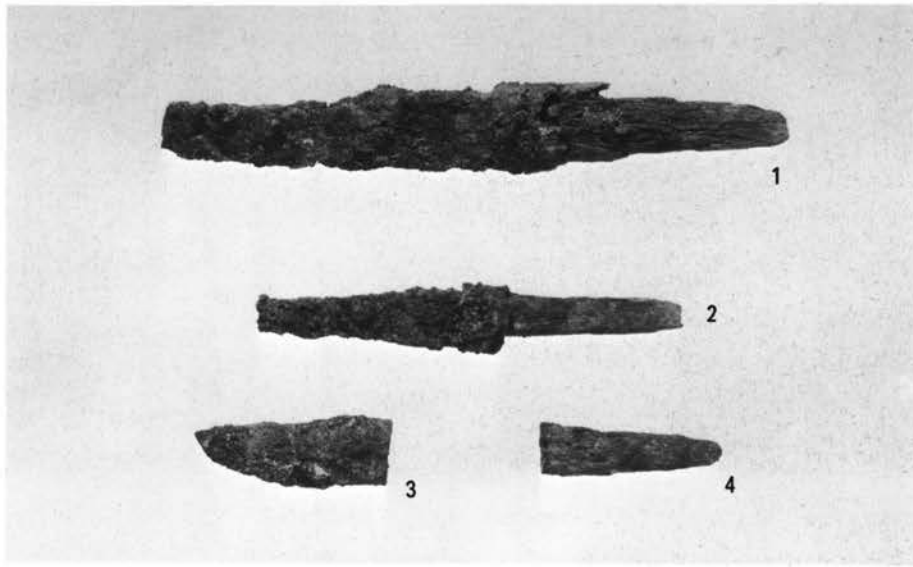
奴山33号墳土器出土状態

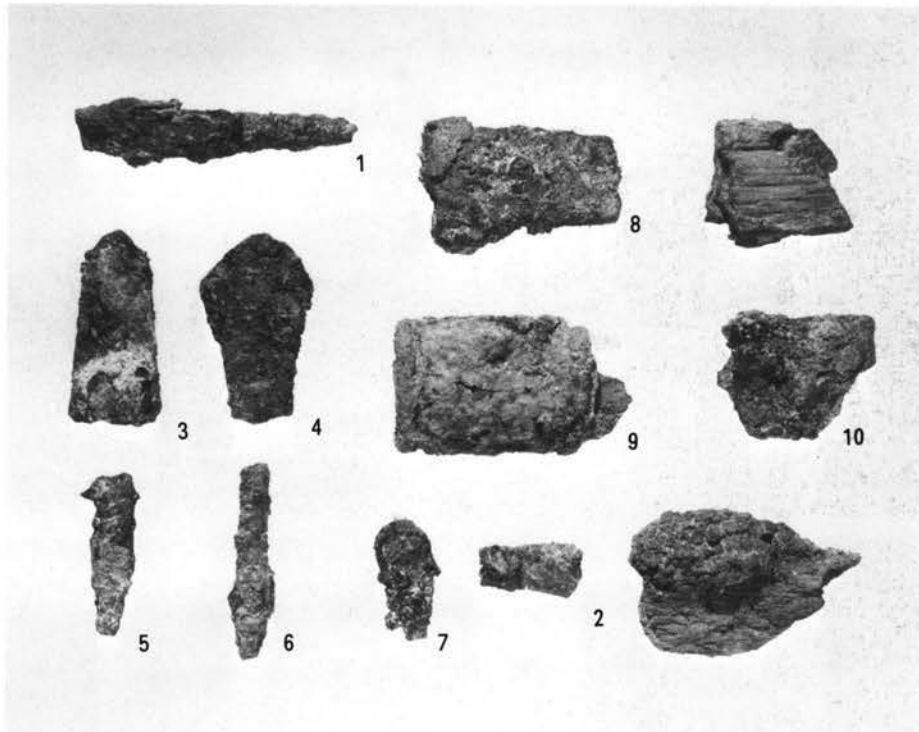


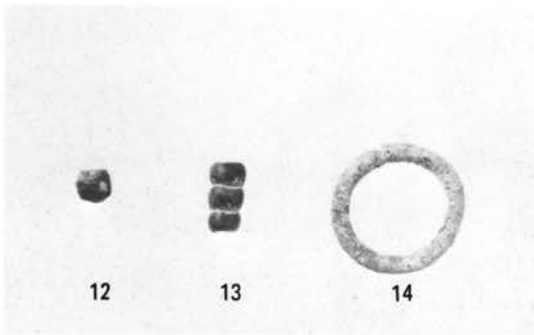
上　奴山34号墳全景　　下同石室全景および土器出土状態

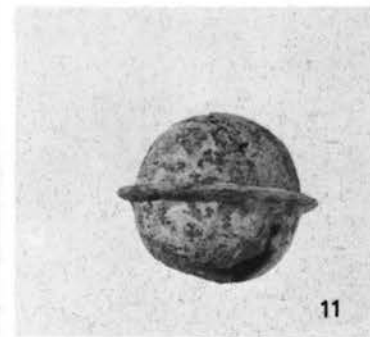
図版 6

上　奴山34号墳玄門
中　同奥壁
下　同玄門と前壁









上　奴山33号墳出土鉄器
中・下　奴山34号墳出土遺物

図版 8

1

61

62

奴山33号墳出土土器

59

56

63

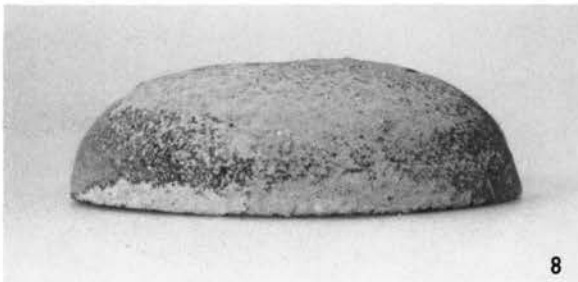
58

64

65

奴山33号墳出土土器

図版10


8

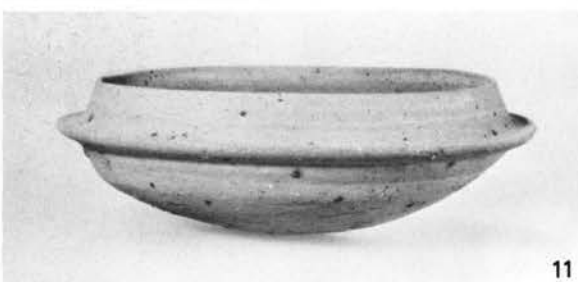
21

9

22

10

23


11

24

12

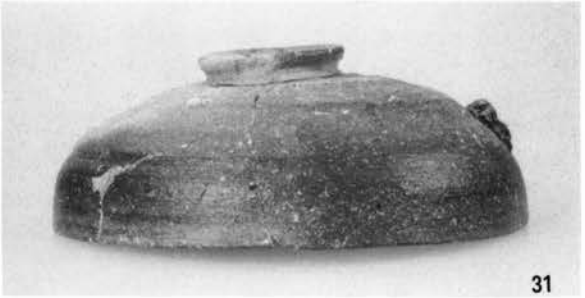
25

13

26

奴山33号墳出土土器

48


31

37

41

36

38

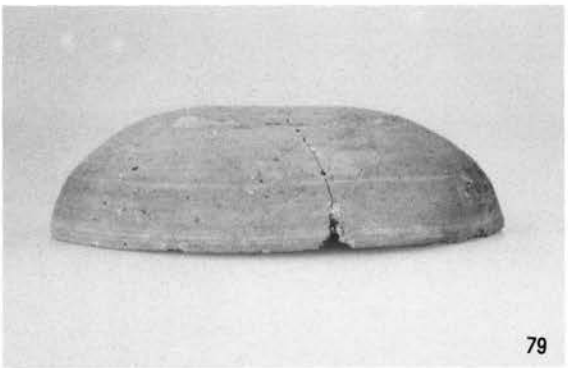
奴山33号墳出土土器

図版12

奴山33号墳出土土器

奴山33・34号墳出土土器

図版14



奴山34号墳出土土器

奴山34号墳出土土器

図版16

92

93

94

95

96

97

奴山34号墳出土土器

昭和56. 2. -9
福岡県教育庁文化課蔵書
NO. B-109156

本報告書を津屋崎町文化財調査報告書第３集とし、下記の報告書をそれぞれ第１集・第２集とする。

第１集	「清田ヶ浦古墳群」	１９７７
第２集	「奴山５号墳」	１９７８

「奴 山 古 墳 群」

津屋崎町文化財調査報告書　第 3 集

昭和 56 年 3 月 31 日

発　行　　津屋崎町教育委員会

印　刷　　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通２丁目９の31